

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Diary of Hisakatsu Hijikata (I)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001075

土方久功日記 第4冊

1923年7月11日～11月27日（大正12年）

解 説

この第4冊の表紙には、「十一月二十七日迄」と書かれているが、第4冊は、十一月二十六日で終わっている（第5冊は、十一月二十八日から始まっている）。

第4冊で、最も大きな出来事は、9月1日の関東大震災により、番町の家が消失したことである。地震の揺れによる直接の被害はさほどでなかったが、地震の直後、各所で火事が発生し、深夜には火は直ぐ近くまで迫り、火に追われた久功等は、家の荷物を運び出し、母と妹・英子、生後半年に満たない忠久を守って、近所の家に避難させて、知り合いの所で夜を明かした。

2日の早朝、家へ戻ったら、長屋門だけがただ一つ立っているだけで、家はすっかり燃え落ち、柱一本残っていなかった。その後も混乱が続いたため、久功が日記を書けるようになったのは、2週間後の14日であった。生活が落ち着いてから、何度か焼け跡を訪れ、わずかに残った本や作品を拾った。

番町の家は、祖父・柴山矢八のものであったが、当時、祖父は既に退役していて、鎌倉の別荘に住んでいたため、久功の家族が住んでいた。この家が失われたため、家族は軒々と住まいを移すこととなった。一家は、震災後10日間ほど、上目黒の小城家に身を寄せ、その後その近くに移り住んでいたが、暮には杉並村の借家へ移った。

この年の8月16日に、「あまり机のあたりがひどく散らかって居るので片づけて居たら、鉛筆できたならしく書きなぐった、大正十年の日記が出て来た。読んで見ると不思議である。他人事のようでもある。これから毎日少しづつ、読んで見て、興味のあるものを書きうつして見ようと思ふ。」と記されている。現存する日記は、大正11年（1922）年7月から始まっているが、久功は、それ以前から日記を書いていたことが分かる。恐らくは、大正8年（1919）の父の死を契機に日記を書き始めたのではないと思われる。このころのことを、久功は、次のように記している。

《ばらばらと出鱈目にそれを読んで居ると、驚くのは、其頃の私は decadente な生活の絶頂に居たことである。

其頃、私は久敬の手伝いをしながら、模型舞台に関係して居たし、従って芝居の方にも時々縁の下で道楽をしたり、又帝大、早稲田等の劇研究会の人々、帝劇、明治座等の俳優、女優ともしげへ逢ふ機会があった。》

大正9年（1920）の12月28～30日、土方与志は、山田耕作の帝劇での歌劇公演を手伝ったが、久功もこの公演に関わった。そして翌年の正月17・18日、この公演は大阪でも行われたが、久功も大阪まで同行した。

また、《千九百二十一年、それは私が芝居と本とに一番親しかった一年であつたらう。小石川で其頃模型舞台をやって居たので、新劇を見る機会が多かったのと、一つには、其の少し前から私は翻訳物の戯曲とさへ云へば、出来るだけ読んだ。（中略）五月十七日に明治座に行つて居る。明治座は小山内氏、左団次氏等の七草会がいつも第一の出物とし

て、いつも試演的に新劇をやっている居たので、行く機会も自然多かった。》とも書いている。

たいへん興味深い事が記されているのであるが、それ以後、古い日記を書き写す事は無かった。久功は、読んでみて、書き写す意味がないと思ったのかも知れないが、恐らく、関東大震災による火災で焼失したのであろう。

8月21日、叔父の柴山直矢（海軍大尉）の乗っていた潜水艦が、瀬戸内海の仮屋沖で沈没するという大きな事故が起こった。その後1週間、鎌倉に居た久功は、来客の対応などに追われ、日記も書けない状態であった。

[4 千九百二十三年七月十一日より 全年十一月二十七日迄
大正 12 功]

[表紙裏]
[衷心の親愛を以て 亡き父上に 久功]
[見返]
[×を附したるものは別に原稿紙に移ししもの]

[2 頁白紙]

七月十一日

梅雨霽れの日中の空を吹き渡る風です。

遠鳴の海を聞くように

風は重い響きを残しては鳴り鳴り

私は縁側のとつばな^{とつばな}にねそべって

顔だけを強い夏の日からよけて

空を、空を飛ぶ雲を眺めます

低い雲は大きな白い塊を作って

樅の木の後から静かに現はれては

快い脅威を以て頭の上を北へ北へ

遂に屋根の廂に遮られるまで流れて飛んで

時に輝き時に戻ります

低い雲の上に高い雲があります

高い雲はもう動きません

かきむしられたように、引き裂かれた真綿のように

あらゆる混沌のまゝに、さて

少しでも動かうとはしません

そしてその引裂かれた凹々にコバルトの空が

もう色でない、深い色の空がのぞきます
それは有らゆる光と所有闇との混光です
梅雨霽れの日中の空を吹き渡る風です
遠鳴りの海を聞くように
風は重い響を残しては鳴り鳴り
一羽の燕が気まぐれに、木の葉のように
その風の隙間を縫って飛びます
高い樅の木が、古い檜の木が
大様にゆらりゆらりと揺ります
樅の木の後から
低い雲が静かに静かに
併し際限もなく湧き昇って
頭の上を北へ北へ緩やかに
併し早くも流れては消えてゆきます
今、私の空妄の心に
突然にこびりついた重い影——
あゝ、私は余りに人の噂を聞き過ぎた！

〔×を附す〕

折角目白まで出かけたが、モデルに休まれて夕方空しく帰ったので、何か物足りない心地がする。

十二日

夏の夜の電燈に纏ひつくかなぶん！
七色に輝く翅を持ちながら
何と云ふ無様にも醜い蟲けらよ
昼の間、深い葉蔭に
いもむしよりも無精げに黙って居るくせに
何と騒々しい、いまいましいかなぶん！
やうやく皆が寝静まって
一日中の此の僅かな時を
少しは落着いた心で机に向ふ私を
お前等の群は容赦もなく
持前の盲者のような無鉄砲で妨げるのか

それとも私のむさくるしい書斎には
何かお前等の死を賭けるような貴い誘惑があるのか

〔×を附す〕

十三日

朝から晩まで、糠のような小雨が降って寒い。私の誕生日なので、中島の処で夕食を
食べて、中島と一緒に小室の処を訪ねたが留守だった。

✓身を知ると云ふことほどの悲しさを——
灯の辺めぐりてかなぶんが飛ぶ

十四日

曇———夜雨

〔欄外に記す〕
〔煙〕

暗い電燈のもとに
ひまはりの花がうなだれるよ
かなぶんが翅を鳴らして飛ぶよ
やもりが用心深く硝子戸の外を這ふよ
其外には
音もない
風もない
暗緑の
蒸々と暑い真夜である
“She is as proud as Lucifer”
(彼女はルシファーのように尊大です
それどころか、彼女はいつでも純真なのです
だが、君はいったい何処で
真実にぶつかるだらうと予期するのです
……是等の婦人達のうち
最もよい婦人が全く腐って居るのです……)
窓の外が暗いよ
雨を持つ雲が低いよ

彼女の前に——Doubtless, this is my fate !
 彼女の前に何んな運命が口をあいて居るのか
 煙よ、煙よ
 灰皿から昇る青い煙
 蚊やり香から立ち昇る紫の煙
 緩やかに緩やかに、時たまに
 ちりちりとゆらめく煙を見つめて
 私の心が
 ちりちりとせつなく震ふよ、^{むせ}嘘ぶよ

〔×を附す〕

十五日 sunday

細雨。午からだんだら幕のように、いつともなく止み、寒く曇って其のまゝ、日が暮れる。
 晩、お玉叔母さんが来る。

退屈な心よ——
 ✓ ☐☐☐☐☐☐——
 闇に
☐☐
 蠟燭をともしてみても、焰のゆらぐを見てある
☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐

✓退屈な心よ——
 蠟燭を闇にともして
 その焰、静かに揺るをちっと見てある

十六日

終日、蔭気な小雨が降り続ける。

十七日

まだ――降り足りないと見えて、はっきりしない。朝から降ったり止んだりして居る。
 私はもうまるで、何をするのもいやになって居る。頭がしくしく痛む。腹がぐづぐづうづく。体温は七度六分。

朝から通子^{〔小城〕}サンが遊びに来る。宿る。

✓ほのかなる灰色の空
 青柿の堅く太れど——
 胃を病める

から。中島はまた来週からモデルをかへてやろうと云ってくれるけれども、自分はあまり気のりがしない。

夜、佑サンが帰ってゆく。

二十三日

朝から学校へ行って、吉邨の二郎ちゃん¹⁹⁷⁾を訪ね、吉田の謙ちゃん¹⁹⁸⁾を訪ね、建畠先生の処へ行って、夕方帰る。

ここに若い婦人が居て私を見ます
私が婦人を見ます
あすこに青い海があります
私が青い海を見ます
おや、私は何を見て居るのだ
婦人の心臓が火になって燃える
だが、あすこには青い海が——
おゝ、私は自然の美しさを知って居ます
いや、あの婦人は孕んで居る——
それなのに私は青い海が
気になって気になってなりません
而も受胎せる婦人よ
あなたは結局
私の蒼ざめた魂にまで
血の油を注ぎ
腐肉の香火をともしでは止まないのか
それとも私は美しい夢が消える前に
その夢を抱いて
底しれぬ青い海に身を沈むべきか

〔×を附す〕

二十四日

晩方、動坂の石膏屋まで行て来る。^{〔ママ〕}夏の夜の街には、のらくらものの閑人と一年中休む間もない働き人とが入り乱れて、併し皆誰れも彼れも浮きたって、さて明るい電燈の海に渦巻き、押ししかへす。私はものめづらしく、神田の夜店を一軒々々丹念に見て歩く。

二十五日

朝のうち、神田に出て来る。

夜、田辺サンに行く。十時前帰らうとすると、招魂社¹⁹⁹⁾の側に、往来に人だかりがして居るので、自分も皆の見る方を一寸見ると、蒲焼屋の二階で朝鮮の女が踊って居るのだった。自分も物珍らしく立止まって一くさり見て居た。

服装は極普通見る、白の上着に黒い長いスカートを、胸からふっくらと着て、髪にも衣類にも何の装飾もない。三人の若い娘のうち、一人が大きな鼓のようなものを首から吊って、両手の平で、まるでリズムを超越して打つのである。それは、薄っぺらな半ば金属的な余韻のない音である。その鼓のようなものの前に、他の二人が鼓手に向ひあって並んで立つ。鼓がなり出すと、突拍子もない声で其の二人が唱ひ出すのである。それは、日本の木遣のようなものを思はせる。それにつれて三人のグループは唱ひながら、鳴らしながら、其まゝお互の位置をくづさずに、四五歩づつ前後に歩むのである。そして、それだけである。唱手の二人は、時々右手を顔の処にもってゆく。手には白いハンケチを持って居る。いかにも情ないものである。いかにも^{〔頼〕}廃退的な調べである。それは亡国の民が異国で奏するのに応はしい。如何に朝鮮でも、あの殺風景な白粉も塗らない娘達が、芸者であるとは思へない。かと云って、料理屋の二階で日本人の酒の肴のなぐさみになって居る彼女等に、全然いはれないとも思へない。

彼女等は何時までたって止むともなく、其の同じ調べを、単調にいつまでも繰返して居る。とうとう隣の間から、少し酔って居るらしいゆかたがけの日本人の男が出て来て、彼女等に何かささやくと、女達はそのまゝ途中で彼女等の踊をやめてしまった。雲が多いので月は見えないけれど、雲の割れ目がそこここ白く明るんで居る。

二十六日

詩集どころではない

私は東京駅で買って来た詩集から目をはなして

窓によります

久々で汽車に乗ったのに

而もこんなよい夕を汽車に乗ったのに

先へゆけばもう暗からう

詩集どころではない

空の美しいこと

風の涼しいこと

だがまだ――眺めは灰色だこと

赤錆びた鉄道線路が

何本となくうね――並んで

今其処此処に工夫等の一群が
仕事を終へて帰ってゆく
彼等が子供のように
からかふこと、さざめきあふこと
彼等が併し
日暮前の風のように晴々しいこと
あゝ、ほんの少しばかり緑が見えました
田畝の隅っこに蓮の蕾が
水々しく明日を待って居ます
過ぎゆく、過ぎゆく電信柱
あゝ、煙突が——
白い高い煙のない煙突
づんぐらと短かい煙突
もく——と黒い煙をはき出す遠い煙突の林
それから……
塗丹屋根、トタン屋根、トタン屋根
ぼつぼつあかりが光り出しました
あゝ、まだ横浜だ——

〔×を附す〕

今日、自分が家を如何な風にしてとんで出て来たのだとは、誰も気がつくまい。今日、自分がどんなに永いこと、机の前に座ったまゝ^{〔溜〕}留息して居たか、ほんの三日前に自分が偶然書きつけた予感が、こんな風に報いられようとは！

鎌倉に來た。梅子叔母様と子供達が來て居る。英昌も書生と宿りに來て居る。

二十七日

朝が静かだ
花園に花が咲いたとて珍らしくもないが
花魁草が紅いよ
百日草のねばつく蒲色
お隣りさんがほうせんかだが
こいつがまた頗るの現代屋だ

鈴なりの赤い花の下に
小指の先が一寸触れても
くると怒ってはじけかへって
蟲の糞を五つ六つ——
そんな恐ろしい気の早い実がぶる下る
まつばばたんに矢車草
毒百合，梔子，秋海棠
白の葵が醜く散るよ
朝顔のつるが伸びるよ，揺るよ
朝っぱらから蟬が鳴くこと
アンネもトスも，四肢をだらしなく伸して
乾いた土にねそべるよ
海は遠く
空と一緒にって見えないが
つんざくような汽笛がなって
汽車が走るよ
森のなかに，屋根の間に
白い煙が残るよ，消えるよ
だが，そこら一面
白い太陽が^ひかんかん照りつけるので——
そんなに朝が静かだこと

[×を附す]

朝から梅子叔母様の処へ行く。帰りに本屋をのぞいて，表現派の劇，アンティゴネ
を買って来て読む。
夜は月が美しい。

✓とても徒し　かくても醒めなんと知りしを　さも長き夢を　見果てぬるかも〈Hへ
の^[贈]送りもの〉

二十八日

湯地孝兄

.....

昨日バーゼンクレーフェルのアンティゴーネを買って読んだ。アンティゴーネは死ななければならなかったらう。それで十分なような気がする。四幕目と五幕目で、作者は主張し過ぎたのではなかったか。其為に、調子がひどく落ちて居る。それ故に、最後の言葉、「お祈りなさい。消ゆる時の間に生きて居る罪のある人々！」が無理に聞える。大変にうまくまとまって居るように見えはするけれど。然るに三幕目の最後はもっと、もっと暗示的な強い力を持って居る。「アンティゴーネは生きねばならぬ！」一つのものを暗示するするには、これで充分だ。否、これ以上を言った処で、それは説明に終るばかりだ。

そして、アンティゴーネが確かに死んだことを見せる為に、四幕、五幕が書かれたとすれば、それは作家が最も陥り易い、そして最も用心深く避けねばならない処のものである。全く此の幼稚なことが、一寸した不用意につけこんで、随分慣れた作家をも、まま陥れることがある。

だが、僕の方がよっぽど不用意で独断的かもしれないね。作家が何んな計画の下に、どんな用意を以て書いたかも知れないのに、僕は昨日買って来て、昨日ずる——と一度読んだだけだもの。其上、僕は君を退屈させたかも知れない。何故なら、君はアンティゴーネを読んで居ないかも知れないし、読んでゐたにした所で、全然違った考へを持って居るかも知れないから。だがまあかまはないだらう。書いたものだから送る。居所を知らせ、それから頭が何んな風に軽くなったか。

鎌倉ニテ

遅く夕食を済ませて、海辺にでも行かうとする処、梅子叔母様が子供達を皆つれて来られた。

二十九日

〔欄外に記す〕
〔ひなたの毒百合〕

飴のような大気の淀み
白い土に撥ね返って
がらがんといりつくような熱光を浴びて
さも快げに赤い毒百合
淫乱に顫える舌のような其の百合の花
向日の死の静寂の中に
時たま訪れるものとしては
只真黒な烏蝶である
大きな黒い翅は青光りに光って

猫の瞳よりも暗い
二つの大きな眼の下から
ひょろ／＼と黒い舌を伸ばして
親しげなかの花の口から
甘い毒の汁を舐めずって
戯れて、もつれて
さて重い静寂の中に
何処にその、真昼の秘密を運ぶのか
再び恋人の訪れるまを
がながんといりつくような熱光を浴びて
さも快げな毒百合
べろべろと、あかいその百合の花²⁰⁰⁾

〔×を附す〕

✓人一人去ると云ふこと――
そんなこと――
そんな寂しさをはじめて知りぬ

人一人去ると云ふこと――
かかること――
かかる寂しさをはじめて知りぬ

晩方浜に出て見た。十六夜の月が美しく、波は静かにその月の影を洵り弄んだ。浜は丁度、海浜博覧会²⁰¹⁾が始まって賑はって居た。一人の懐かしい貴婦人が私の目を捕へた。それが私の思出の傷に触れた。其頃、私は少しはナマイキな心も手伝って、或るカフェーに時々出かけた。そこに□□□□□女が居た。彼女はそんな処に居る人としては歳をとり過ぎて居た。それなのに、而も私はまだ／＼ひどく若過ぎたのに、私は彼女が憎らしい程好きだった。私は彼女を好き過ぎた。私は駄々子が母にすねるように彼女に甘へた。彼女は亦母のような心で、併し謙遜に私に対して呉れた。其頃、私にはそれが飽き足らなかったとは云へ。

貴婦人は明らかに、もっともっと貴婦人らしかった。それにもかかはらず、貴婦人の瞳に出逢った時、私は思はずも、胸に手をあてゝ恐れたのである。私は鎌倉に逃げて来て、四日目の今日、たった一歩外に出たばかりなのに。――

其上、も一人のいやしい女が嘗て咲かなかった、遂に咲かなかった花——まだ新らしい、その悲しみの花をふりかへらせること。斯んな日が続くならば、私は永くここに居ることに堪へられようか。それとも、それならばこそ、思ひきって東京に帰ることが出来るようか。

× 咲 か ざ り し 花 を 思 へ と 似 る 花 の い よ よ に ほ へ ば 一 一
 □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □
 思 ひ 堪 へ ず か も
 □ □ □ □ □ □ □ □

〔×を附す〕

〔欄外に記す〕

〔あゝ、私は漸く女ならぬ恋を恋するような、しめやかな心に沈んでゆくのだらうか〕

三十日

夜、祖父様を引張り出して海浜博覧会に行つて、楽焼を焼かせて来た。

三十一日

今日も、楽焼を焼かせる。夜、町へ、梅子叔母様の処へ。

〔八月〕

八月一日

久し振りで英昌をつれて、昌道を誘つて海にゆく。少しばかり遊んで見たが、あまり面白くない。

ミルトンのコーマスを読んだが、あまりに理想主義的で、しっくりしない。うまさは充分に認める。

国木田独歩の短編を読む。立派な詩だと思ふ。

晩には、梅子叔母様が皆をつれて来られる。

二日

朝から湯地の処へ出かけ、夕方まで駄弁る。

晩、祖父様と梅子叔母様の処へ。

三日

八月の光の朝です

なぜとなく誘はれるままに

独り

只歩む私

一筋に続く並木に

光と風とがもつれあって
そこに揺らめく明るい蔭を生み
ここに温情のあふれる喜びを呼びます

八月の光の朝です
只独りイむ私
目にいっぱい紅白の蓮の花が
淀みなき池の水と共に
小さく優しく顫へます
温情のここに吹き流れ
独りこそ
歩み、イみ
(八月の光の朝)
儂くとも、放たれた心を悦びます

[×を附す]

(独歩礼讃)

独り歩むものは強きかな
又独り歩む『馬上の友』を持つなれど
又独り居ていそしむ間に
(早く一人の友の逝きしも知らず)
『画の悲しみ』も生るなり
ふと髯面の『巡査』をも知りしが
彼も亦独り、涙と共に酒を汲みて笑ふのみ
月の汀に抱きて泣きて
さて捨てられしまゝ忘れし『鎌倉夫人』
(而も遂に忘れ得ざりし『鎌倉夫人』)
風に飛びたる『帽子』と共に
抛げ出されし二つのもの
飛ばせし男の残忍と
又人間性の浅ましき弱点とを！——
時たまに、静かに
『あの時分』をもふり向きしが
(おゝ、われはあまりにも貧弱なる『あの時分』を持つのみ！)

『酒中日記』を終へて僅かに優しきお露を得しが
又、ひそかに
『神の子』の夢も見たれど
あゝ、『悪魔』のみ遂の友なりしか！
独り歩むものは悲しきぞ

〔×を附す〕

朝御飯前に家を出て、八幡様のお池の蓮の花を見ました。見事に咲き揃って居ました。昨年よりよくさうしたように、梅子叔母様の処で、おいしい紅茶とパンで朝の食事を済ませて、九時過ぎには家に帰って居ました。夏の真中に悲しい風が吹いて、灰色がかった白い雲が後から後から飛びました。一日家に閉ち籠って何とはなく、本を開いたり、歌を唱ったりして過ぎました。夜は雨風が寒い程で、星影が青く光ったり霞んだりします。夜、母上が来られました。

四日

倉沢量世兄

……僕も亦此の夏の小さな計画からすっかり裏切られて、今鎌倉に来て、浜に行ったり、本を読んだり、ねころんだりして居ます。それでも天気は、毎日夏らしく滞りがないので、気分は非常に爽やかです。もう来てから十日になります。四五日したら帰らうと思って居ます。来る前にカンバスだの絵の具だの買い足して置きました。帰ったら書き度い絵のことなど考へて居ります。

だん――絵や彫刻に対する考へが違って来るのを感じて居ます。だが一方には「教へられたこと」からは、なか――ぬけきれないものだともつく――感じて居ます。そんなことで、例へば僕などは絵を画く時、彫刻をやる時よりも、ずっとフリーな気持でやる事が出来るので、此の休みの残りを暫らく絵の為にさいて、思ひきった試作をやってみようと考へて居ます。ですから、何もしないようでも色々なことを考へて居ます。何んなものが生れるか、又は全然徒勞に帰して、結局後戻りをしなければならぬか。

併しそんなことは今少しも問題にはなりません。兎も角、やってみようと思ふばかりです。勿論、愈々具体的に生れようとするものは、心細いことに莫然^{〔漠〕}としか考へては居ないのですが、或は只、もっともっとフリーな気持――そんなものを実際は望んで居るのかも知れません。まあ、何んなことになって行くのか、自分でも見ものだと思つて見ます――

午前中に、母上と島村さん²⁰²⁾に行きます。

五日 sunday

朝起きぬけに、祖父に誘はれるまゝ、八幡様の蓮の花を見に行きます。あいにく日曜日なので、朝っぱらから人がうじゃー居ます。で結局この散歩は、少しもいい気持をもって来て呉れません。

一昨日あたりから少し雲が多いと思ひましたが、十時頃には一面に雲が来て、霞むような雨が来ました。風もなく、蒸々していやな雨でした。併しこれはほんの十分とも続かないで止み、又生れ更ったような日が煌きます。けれど、午過ぎにはとうー本物がやって来ました。煙るような雨が、一時間たらず気持よくなぐりつけるように降りました。雷が遠くで鳴りました。雨は止みましたが、日暮まで其まゝ雲は晴れません。海の方が僅かに切れて居ます。

今日一日、何故ともない悲しさがひしーと心をゆすぶります。晩方少し街を歩きます。避暑地と云っても、夜は殊に停車場からこっちは、ひっそりとして静まりかへって居ます。道は歩きよい程に、程よく湿って居ます。星影が青く、其処此処の溝に蛙が鳴きしきって居ます。梅子叔母様の処へ行って、十時に家に帰ると、山の直ぐ下では、小さなお客さん達が集ったと見えて、ヨンヤサノヨンヤサと羅漢まはしをする声が無邪気に、静けさの中に我物顔に聞えます。

星影の青い空のもと

築山の小芝に足なげ出して

夜毎夜毎に

人恋ひの悲しい歌を唱うても

心はやっぱり沈んでゆきます

私は遠い遠いものばかり

じっと見つめて居るような

そんな儚い運^{さだめ}を負うて

さらでも永い次ぐ日次ぐ日を

歩んで、そして

労れねばならないのでせうか

築山の小芝に足なげ出して

夜毎夜毎に

人恋ひの悲しい歌をうたうても

(あゝ、ほんの小さな慰めでもあるなら!)

只黙々と明^{あか}い街^ひの灯を見下して

柔らかな小芝が

一しほ冷たい涙でぬれて
星影の青い悲しい夜が
虚しく更けてゆくばかりです

〔×を附す〕

〔欄外に記す〕
〔✓鶏が卵産んだか此の真昼〕

六日

遠く動かうともせず蹲り
きりきりと眼を射る乱光！
遠山の山の背にそそり立つ
入道雲のめくるめく白光！
けだるい両肘に支へた空心！
〔お前は？〕

日暮前の金の空をかきわけて
ゆるやかに羽をひるがへして
二羽の大鳥が山の背を向ふに越えてゆく
〔お前は？〕

突然耳もとに声が残る
〔私こそ答へて欲しいのですが〕
私は淋しい笑ひを見せる
〔ゆるやかに羽をひるかへす、あの姿は何ですか
あの山の背の向ふに、何があるのです
きららかに輝く金の空
あれがあれらの住む世界なのですか
その上私はみんな、みんな
何故だかが知り度いのです〕
併し一つの声が
冷やかに尚も私を脅かす
〔お前は？〕

遠く動かうともせず蹲り
きりきりと眼を射る乱光
遠山の山の背にそそり立つ
入道雲のめくるめく白光から
人の身の儂さがさしせまる

[お前は?]

[×を附す]

〔欄外に記す〕
[海遠く]

灰白き雲ハ浮くなり――

忘るともなく

忘れし人を呼ばんかな

呼びてみるかな]

昨日一寸降ったせゐか、大変にさらりとして居る。併しあんまり嬉しくない。秋のような風が吹き、裏の山では早く、つくつくほうしまで鳴き出した。鎌倉も小さい時に思ったように、面白い処ではなくなった。明日は帰らうなどと考へて居る。

七日

愈々、朝から東京に帰らうと思ふ。で、九時には山をお暇して、梅子叔母様の処に行く。而して、幾らかでも日の弱くなる頃、三時半の汽車で東京に帰る。汽車は、思ひがけ以上にこみ合つて、日暮前の斜陽が無遠慮に窓から差し込んで、脂ぎった乗客の顔をまともに照らして居る。

それでも自分は、「帰るのだ」と云ふ意識がかなりはっきりして居たので、はたの誰彼が喘いだり、吐息したりする姿が、大変にかけはなれた心境のように思はれた。それなのに、愈々東京駅が近くなって、見なれた建物や電車や広告塔や、又用があるのだかないのだか、そこらを忙がしさうに、併し此の雑踏に慣れきったものののように、まるで無関心に雑言濶歩するらしい人々を見下しても、自分にはまるで先に考へたような、何んな考へもしなかった。少なくとも「帰ったのだ」と云ふような気は、少しもおこらなかった。目は珍らしいものの数々を貪るように見て居ても、心がちっともそれに応へない。そんな気持だった。暫らくぶら――暮して居た自分は、東京駅で電車に乗換へる時、只恐ろしい人ごみを茫然とながめて居るうちに、電車を一台のり後れてしまった。次の電車に自分は夢中で乗って居た。そんなにして家へかへつて、そして家の者達に会つても、やっぱり「帰つて来たのだ」とも何とも思はなかった。只ぼんやり物足りない気がした。

夕食後、弟と二七の縁日に出かけて、新見附に出て、堀端を市谷まで歩いて帰つて来た。それでも、何ともなかった。自分は心の中で、漠然と「明日からだ」。こんなことを考へて、早く十時には寝てしまった。

九日

朝飯をやっと食ひかけた処へ、惣ちゃんがひょっこりやって来る。

笹塚を夜明と共に出て、神田で用をたして来たそうで、一緒に飯を食った。鎌倉から帰ってみると、追に暑い。其上汗が流れないので、体がだるい。それでも雨が降るのより、寒いのはいい。

午後、三人で中二階でごろ／＼横になったが、三人とも寝てしまったらしい。一時間余もして起きたが、まだ／＼暑い。夕食を簡単に早くすませて、母と妹とは鎌倉に出かける。自分達三人は笹塚に行くつもりで家を出たが、市ヶ谷で恵比寿までの切符を買って、そのまゝ小城サンに行く。宿る。

十日

〔小城通子〕

通ちゃんは朝から御飯を食べない。お昼も食べない。晩もほんの一寸食べかけて、籐椅子の上に横になって了ふ。

通ちゃんがこんなにおとなしいと、可哀想になる。相変らず無邪気に、とんきよな事を云ったりしたりして人を笑はせるけれども、ひょっとすると通ちゃんも娘らしくなったなと思はせることがある。そんな時、何だか気の毒にもなる。影がずっと通り過ぎるような気がする。

夕御飯を食べて三人で帰る頃から、稲妻が光って雷がなり出す。市ヶ谷へついた頃、とう／＼雨がやって来た。惣ちゃんが昨日家を出る時、まだ誰も気がつかなかったさうで、今日留守の間に、中井サンから電話がかかったさうである。

遅く、母と妹が帰って来る。

十一日

〔小城保様〕

一昨日の晩方、兄と惣ちゃんと三人で目黒の家をお訪ねしました。三人で宿りました。昨日一日、兄と惣ちゃんとは、色々なことをして働きましたよ。其の間僕は、籐椅子にねそべって、通子さんと話しをしたり、「ブク」にからかったりして居るのです。「ブク」は「ブクはハッチぢゃない。ターザンだ」と云って、大変偉さうな様子をします。で僕が、「お前はハッチぢゃないのか。ターザンなのだね。道理で強いと思ったよ。」と云ってやったら、それは滑稽な程得意になって居るのです。僕はブクにかなはなくなると、さう云ってやるのです。すると、ブクは得意になって、僕をいぢめるのを忘れてしまふのです。なかなか愛嬌ものですね。ですが、どんぶりの中にどろ／＼の餡をもって来て、無理に嘗めさせるので、これには辟易しました。「何うして食べるんだい。」と云ったら、「こうするんだよ。」と云って、さも訳ないと云ふように、小さな人差指でひっかき取って、べろ／＼嘗めるのです。で僕も指にまきつけて嘗めるのです。すると、も

っと嘗めろと云ひますから、もと舐めてやります。^{〔っ服カ〕}其時の僕と云ったら、半分夢中なの
です。それから兄や惣ちゃんの働いて居る処へ素足で下りて行って、其辺をうろへし
て居ます。

僕も一角働いて居るように思っているのです。自分ながらいい性分だと思ひます。何
しろ外は日が照って暑いのですから、ぶらぶらして居たって、相当に汗が出ますからね。
ですがそれも何うでもいいのです。

通子さんは、夏負けとでも云ふのでせう、昨日は朝から御飯を食べないのです。お昼
も食べません。そして晩もほんの申訳程に食べかけましたが、直ぐに止めて了って、籐
椅子の上に横になって黙って居るのです。通子さんがこんなにおとなしいと、可哀想に
なります。そんな時に、通子さんも大きくなったなと思はせることがあります。そした
ら僕は、何だか、淋しいような、切ないような気がしてなりませんでした。僕は何故か
千九百二十年七月十日に作った自分の詩、つたない「ニーナの夢」を考へて居たのでし
た。僕の頭の中に、何うして通子さんと、この「ニーナの夢」とが結びついたのだから、
さっぱり解りません。

われ悲しき夢を見き
身と心とを捧げし恋人あり
甘き歡樂の涙に
彼女の美を称へ
彼女、優しき眼もてわれを見き

そを一日
彼女は眠り眠りて遂に覚めず
薔薇色の雲に夕は来り
小鳥のさざめきに且も廻れり
かくて一日は過ぎ
二日はゆきぬ
彼女の眠り、深く静かに

かくて星かげの夜に覚めし彼女は
わが恋人は
おゝ、醜くも婁れし姿の……
新らしき涙に彼女を抱けば
恋人の眼にも涙あり
きららきら輝けど……

われ彼女を堅く堅く抱きて問ひぬ
「おゝ、われも亦かく醜きや」

おゝ、醜くき二人の抱擁
涙の抱擁
われは捨てじ
そは涙の、涙の
そは恋にあらぬ涙の抱擁のかなしさ

惣ちゃんは朝早く帰ってゆきます。すると、其の後から直ぐ又、中井サンから電話がかかりました。笹塚では皆が大分心配して居たらしいのです。で晩方笹塚に出かけて見ました。君ちゃんの所へ行ったら、君ちゃんが一人で居ました。惣ちゃんが黙って出て来てしまった日、笹塚で変な噂があったので、皆は本気になって心配したのです。それは、一人の書生が大変に牛屋サンに世話になったけれども……死ぬとか何とか云ったのださうで、そんなことが早速惣ちゃんに結びつけられてしまったのださうです。それに前にも、惣ちゃんは越後の方に出かけたことがあったりするので——そこへ当の惣ちゃんがやって来ました。「怒られちゃった」と云って、だるさうな顔をして。惣ちゃんの所へ宿ります。

十二日 sunday

珍らしく夜の明けるのと一緒に起き出て、畑の方を一廻りして来ます。道草は、さらへと快く冷たい露を足の先きにふりかけます。太陽はまだ昇ったばかりで、赤い柔かい光を投げて居ます。帰ったら惣ちゃんも起きて来たので、又一一緒に町の方に出て来ます。十時には亦惣ちゃんを引張って家へかへります。

自分は何を書いて居るのだ。否。相当に実のあることでも、ひょっと表現の道が塞がってしまふと、こんなものだ。

十三日

珍らしく武さん²⁰³⁾が茅ヶ崎から出て来る。晩には小林ひさし氏も来る。惣ちゃんも晩まで遊んで居たが、九時頃に帰って行った。

十四日

小城さんから電話がかかって来た。それによると、惣ちゃんは今日また小城さんに行って居るとか。まったく惣ちゃんは何うかして居る。夕方通ちゃんをつれて来るとか。

後再び電話で、明日朝行くことにすると云って来る。

夕食後、千駄ヶ谷に甘露寺の家を訪ねたが、家中留守なので、そのまゝ目白に行く。中島の処を訪ねようとしたが、もう八時になって了ったし、自動車が来ないので、ぶら／＼小室の処へ行く。珍らしく小室は家に居た。タイ焼屋の若い衆が、一軒置いた隣の飯屋から呼んで来てくれたのである。タイ焼屋の二階が小室の下宿である。六畳の間は、暗い電燈の下に小さい机があるだけで、綺麗にかたづいて居る。昨年の帝展に出したものと、此の春、東台に出したものと、等身より大きな女の裸像が二つ置いてある。巴里乞食と呼ばれる、併し仏様のような小室は、暫らくして、オイー一杯飲まうぢやないかと云って、近所の氷屋からよく冷えたビールとエダマメと氷水とをとって来て呉れる。十時半まで気持ちよく話して帰る。

十五日

朝のうちに、惣ちゃんが通ちゃんをつれて来る。二人とも宿る。晩方、兄と惣ちゃんと三人で、四谷通から麴町の通を買物ながら散歩する。

十六日

兄が通ちゃんをつれて菊名に行くと云ふので、朝四時から起きて騒いで居る。五時には家を出て行った。惣ちゃんも霊岸町²⁰⁴⁾まで行くから送って行くとして、一緒に出て行った。家は急に静かになった。もう少し落着きさうなものだが、さて先日来の惰性がなか／＼静まらうとしない。頭の中がちぎれ／＼になって了って居る。あまり机のあたりがひどく散らかって居るので片づけて居たら、鉛筆できたならしく書きなぐった、大正十年の日記が出て来た。読んで見ると不思議である。他人事のようにでもある。これから毎日少しづつ、読んで見て、興味のあるものを書きうつして見ようと思ふ。

△《ばらばらと出鱈目にそれを読んで居ると、驚くのは、其頃の私は decadente な生活の絶頂に居たことである。

其頃、私は^{〔土方与志〕}久敬の手伝ひをしながら、模型舞台に関係して居たし、従って芝居の方にも時々縁の下で道楽をしたり、又帝大、早稲田等の劇研究会の人々、帝劇、明治座等の俳優、女優ともしげ／＼逢ふ機会があった。

又其頃、久敬の処には、音楽家、画家、詩人、文学者、芝居に関係を持つ雑多人がしげしげ出入して居たので、従って私の生活も其等の人々との習慣と何処までか妥協しなければならなかったのである。三日目毎には、飲んだ騒いだと書いてある。今考へても、其頃はよく酒を飲んだものだと思ふ。併しまた、直接私自身に関係がなかったにした処で、其頃は又よく仕事をした。二晩も三晩も徹夜をするのは稀でなかった。尤も、その

徹夜の半分は、飲んだ騒いだではあったけれども、それでも飲んでも騒いでも、仕事を為さないことは決してなかった。

で、自由にその頃の事を思ひ出したり、又は当時書いたものをそのまゝでも、毎日少しづつ書いてみようと思ふのである。

併し、当時書いた日記は、実にぞんざいで、自分ながら読めない処もあるし、又まるで簡単に事件だけを^{〔羅〕}拉列してあったりするので、よく思ひ出せない処なども、沢山に出て来る。》

十七日

朝十時頃から、目白の中島の処へ行く。夕方帰る。

朝から曇って涼しい。

何処からともなく這ひ寄るものうさ
太陽が白みゆく星空を追ひやってから
再び底しれぬ星影が太陽にかはるまで
短かい命を忙しげに蟬が鳴き続ける
そんなものうさ、永い夏の日の毎日
(あゝ、私をこのまゝで愛してくれるものは!)

何処からともなくさしかける薄闇
雲の多い夏空がきりきりと頭心を貫き
のろのろと鈍い塵光、流れない汗
——時にその悩ましさが幻想めく悦びを投げてはくれるけれど
そんな恐ろしい影、眼に映る不思議な空虚
(あゝ、私をこのまゝで愛してくれるものは!)

やうやく樹々の枝葉が黒ずんで堅くなり
蟬、かなぶん、又街々のどよめきもいつに変わらないけれど
曇日、曇日
その恐ろしい静けさの中に已に秋の風が育まれ
其の上 ^{ひをむし} 蛸 は旦に私の空しい心の中を黙ってばさばさと飛びまはり
夕に私のきれぎれになった心の上に慎ましく黙って死んで居る
(あゝ、誰人ぞ、このまゝの私を信じてくれる友よ、少女よ!²⁰⁵)

〔×を附す〕

十八日

〔小城通子〕
ミッティー！

どうか、あまり私を羨ましがらせないで下さいね。

鏡のような穏かな湾の中を船が滑るように、いつともなく、いつのまにか沖の方へ乗り出します。夜明前の青い空が静かに広がって、赤い光ない太陽がぼっかりと低くかかります。

それから……紫の鋸山が淡々と霞み、大島が見え、ふと目を返すと、くっきりとモグラのような城ヶ島が、淡い喜びと悲しみとを一緒に投げかけます。それから……益々沖へ出てゆくと、もう目にみえるかぎりの海の面には、鷗の群が飛びかひ、白い波が踊るばかりです。お、お、私は今、こんな光景を思ひ出します。

それは三年前の夏でした。何処にも隠れるところのない太陽は、遠い水平線の上に、雲もない空に、いつまでもいつまでも、力ない光を投げて居ました。青森の街も遠く後の方に霞んでしまひ、今しがた真左に見えた、小さい名も知らない、真白な燈台も、いつか置き去られて、今はそれともない小さな白い一点となって了ひました。右舷は影つてゐる上に、冷たい風があてるので、甲板に出て居る人達は皆申合はせたように、それでも暖かく風のない左舷に集って居ました。私も日あたりのよささうなベンチに腰を下して、何ともない、それで居て何となく、目新しい此の日暮の景色を眺めて居ました。そこへ女の子が笑ひながらやって来ました。私達は、上野を立つ時から同じ汽車に乗り合はせて、すっかりお友達になって居たのです。「いい気持ですね。」と云って、女の子は私の傍に腰をかけました。「遊びにいらしたのですか。」と聞いたら、女の子は黙って少し笑って、首を横にふりました。「はじめて函館にいらっしゃるのですか。」「いいえ。」「では、もう何度もいらしたことがおありなのですね。」女の子は一寸笑ひました。そして、「函館に私のうちはあるのよ」と云って、ちっと私の顔を見て居ました。それから……（あ、それはどんなにいちらしい光景だったでせう。私は永いこと、女の子の顔を、目もはなはず見つめて居ました）。女の子は無邪気に、色々私に話してくれました。「私のうちは、函館からは直ぐよ……函館に着けば、家中の人が迎へに来て居るに違ひないわ。きっと皆は提灯をもって来て居てよ。だって、私の家へゆくところは、夜はそれは真暗な道ですもの……」。北国の小さな街——函館が、女の子の故郷だったのです。それから女の子は、斯うも云ひましたよ。「私は東京よりも何処よりも、函館が一番すきよ。」私は其時、故郷と云ふものがどんなものかかと云ふことを、始めて知ったように思ひました。私は時のたつのも知らずに、永いことベンチに靠れて居ました。船は湾の外をゆれて居ました。

波は半分荒れて来て、甲板の上は一面に重吹でべたべたになって居ました。着物はぐっしょり濡れて冷え――しました。立って船室に入ろうとすると、女が向ふからにこにこして来ました。函館湾に入って、船は棧橋から少し離れて暫らく止まって居ました。

女の子は私のところに来て、「では私はここでおりのよ。さよなら」と云って頭を下げました。「あゝ、お母様も来てるかしらん」、「とうへ函館にきましたね」。女の子の瞳が美しく輝きました。も一度さよならと云って、女の子は行ってしまひました。私はボーイを指図して、忙がしく荷物を仕末して居ました。それきり私は女の子に逢ひません。

それから菊名。あなたがたが楽しい日日を送って居られる菊名ですが、私はたった一度行ったきりですが、よくおぼえて居ますよ。色々のことを思ひ出します。ですが、長くなりますから、また気のむいた時に書くことにしませうね。

ひさかつ

~~~~~

晩方、江波の処へ行つた。お土産のブランデーを一本あらまし一人で飲んでしまつて、奈良旅行以来、はじめて酔つた。

△《千九百二十一年の正月は、事件に於て前年の暮から放すことが出来ない。前年の暮に押しせまつて、<sup>〔土方与志〕</sup>久敬は山田耕作<sup>206)</sup>さんと婦人矯風会の主催をたすけて、二十八、二十九、三十の三日間、帝劇で歌劇の公演をやつたのである。

内容は次のようなものだった。

二十八日

オーケストラ

夕の祈祷を唱ふ巡礼の行進……エクトル・ベルリオーズ

牧神の午後の前奏曲……………クロード・デビュッシー

仏蘭西軍隊行進曲……………カミュ・サンサーン

歌劇

「帰れる児」（ランファン・プロディーギュ）……デビュッシー

登場人物

父 シメオン——アレキサンドロフ・チキン

母 リヤ ——ポーリャ・ヘルミーデス

息子 アザエル——伊藤祐司

舞踊——エレナ・バヴロヴァ

合唱 召使、従僕、村人、其他

二十九日

オーケストラ

歌劇「名歌手」の前奏曲……リヒャルド・ワグナー

歌劇「ローエングリン」……

ローエングリンのうた 独唱 ユーゲン・ステペルスキー

「亜米利加」よりのシンフォニー…アントン・ドヴォルジャック

歌劇「名歌手」より……リヒャルド・ワグナー

ヴァルターのうた 独唱 ユーゲン・ステペルスキー

歌劇

「タンホイゼ」第三幕 第一場・第二場……ワグナー

登場人物

エリザベート——ニーナ・スコロホドフ

ヴォルフラム——アレキサンドロフ

巡礼の群

三十日

歌劇

「タンホイゼ」第三幕第一場・第二場

オーケストラ

牧神の午後への前奏曲……クロード・デビュッシー

歌劇「名歌手」の前奏曲……ワグナー

歌劇「帰れる児」

ところで、明けて千九百二十一年の正月に、これが遥々大阪まで持って行かれることになって居たのである。そんな訳で、私は正月の三ヶ日が過ぎると直きに、「星」の七階に人を待ちあはせたり（「星」の七階が三ヶ月も前から、此の団体の事務であり、練習所となって居たのである）、小石川の土方の処へ出かけたり、運送屋にかけ合ひに行ったりして居た。丁度、寒い折柄、毎日天気がじめ／＼して、よくぬかるんだ道に靴をうづめたのをおぼえて居る。何しろ舞台の大道具、小道具をはじめ一切東京から運んだのだから、たいしたさわぎだった。

其上舞台では、一切ディレクト・ライトを避ける為に、ボーダー・ライトにはすべて二間長のシェイドをつけるようにしてあったし、タンホイザーの森の場面などもすべて「まるもの」でやったので、運送費だけでも随分大変らしかった。で自分は約束の日よりは早かったが、十一日の夜には一人で大阪に出かけた。大垣辺から米原あたりは烈しい降雪だったが、十二日の午前、大阪についた時は、曇っては居たけれども、雪の降ったらしい様子もなかった。

書いて読んで見ると、まるでつまらないから止める。十七日、十八日の二日、歌劇は公会堂で公演された。人は沢山入った。皆が東京にひき上げてからも、私は暫く大阪に居た。其の間に、神戸に川崎を訪ねて御馳走になり、長田に広子<sup>207)</sup>さんを訪ね一緒に須磨へ行ったりしたけれど、見物した以上、何もおぼえて居ない。二十五日に奈良に遊びに行って、其晩東京に帰って来た。》

十九日

□□□□□□□□□□□□ 久々で、飲み過ぎたので、頭が重く、体がだるくて一日ごろ／＼して居た。

二十日

朝のうち、江波の処へ行き、一緒に木山を訪ねて学校に遊びに行く。午過ぎ、気持ちのいい shower がやって来たが、直ぐ止んでしまふ。松上が遊びにやって来て、二時間近く<sup>〔退〕</sup>怠屈な話を聞かされる。

晩方、母と鎌倉に来る。

△《千九百二十一年二月の処にこれだけ記してある。

十一日だったか目黒に出かけた。晩七時頃から三時近くまでかかって、保ちゃん<sup>〔小城〕</sup>と油で静物を画いた、と。私はよくおぼえて居る。そして、小城の叔母さんと暫らく絶交したのは此の時からである。と云ふより、事實は叔母さんから以後足止を喰ったのである。だが、あはれな叔母さん！保ちゃんは今だに絵を止めるどころか、益々盛に、而もだん／＼真面目に絵を画きつゝけて居る》

《同年六月末頃の処にも、憤然とこんなことが書いてある。小城の叔母サンは、何処まで悪賢く偏んで居て、そして利己の為には、あらゆる巧を敢てするような、平気であるような、そんな人なのだらう。昨日だったかも、<sup>〔漠〕</sup>莫然とうちに宛てゝ、誰の罪でも過でもあるまじき、そして極些細な事で、たまらない不愉快な、ひどく破聯耻<sup>〔廉〕</sup>な手紙をよこした。併しお気の毒な事に、少なくとも私はそんなこせ／＼した、そんな破聯耻<sup>〔廉〕</sup>な行為と、そんな汚らしい皮肉に対しては、至極鈍感だ――

私は、其の時分の事を思ひ出すのも不愉快だ。只、其時分、どんなに表裏のつぐなはない「巧」が自分を不快にしたかをここに記して置く》

△《千九百二十一年、それは私が芝居と本とに一番親しかった一年であつたらう。小石川で其頃模型舞台をやつて居たので、新劇を見る機会が多かつたのと、一つには、其の少し前から私は翻訳物の戯曲とさへ云へば、出来るだけ読んだ。そして、始めのうちは、ゲーテ、ハッセル、シェイクスピア、其他、シルレル、レッシング、など少しはかちつ

て来て、其頃、私は漸く近代のものに読み耽<sup>(耽)</sup>って居たのである。で本と云っても、美術に関するものの外は、殆ど翻訳戯曲ばかりと云ってもいい程だった。二月三月の日記が殆ど記してないからよくわからないが、五月十七日に明治座<sup>208)</sup>に行って居る。明治座は小山内氏、左団次<sup>209)</sup>氏等の七草会<sup>210)</sup>がいつも第一の出物として、いつも試演的に新劇をやっている居たので、行く機会も自然多かった。否私は金がなかったから、そんな風な関係で招かれてもしなければ、求めて芝居見物などして居られなかったのである。で四月十九日も、第一にジョン・メイスフィールドの忠義を、左団次氏等がやったのである。忠臣蔵が「僕君」「あなた」と云ふ言葉で演ぜられたのだから、随分人を驚かせた訳である。其他は、いつもの橋弁慶や朝顔日記だった。同月三十一日にも、明治座に行った。それは、新劇座の初演で、閻魔の目玉（泡鳴氏作）、国境の夜（雨雀氏作）、アラビア人の天幕（ダンセニイ作）、生霊（勇氏作）で、其うち、国境の夜とアラビア人の天幕とは、私達の模型舞台で飾ったものを、そのまゝ上演したのだった。これは、役者が非常な熱心でやってくれたので、随分な処まで出来たと思ふた。六月四日には、今度帝大劇研究会が二十二日から三日間出すと云ふので、田中総一郎氏的一幕物「素描」を飾ったが、これはものにならないで了った。同月十二日には、若者座のダンセニイ劇を見に行った。確かテント・オブ・アラプスと天国の門と野の宿だった。それから、七月一日に祖母<sup>[柴山琴子]</sup>がなくなったりして忙がしくして居たが、八月も末になって、落つき出した頃には、本を読むようになって居た。ハウプトマンの馭者ヘンシェルやストリンドベルヒのペリカンなども、其時分に読んだようである。当時の日記には、斯う書いてある。

ペリカンはまるで、五年前で五年後の自分の家の有様をモデルにしたような気がして、非常に興味深くもあり、切實にも感じられると。ストリンドベルヒは、私の一番好きな人の随一である。今でもさうである。八月三十一日には、ストリンドベルヒの死の舞踏の第一を読んで居り、翌日には、同じものゝ第二部を読んで居る。二日後には、同じ人の白日の夢をも読んで居る。九月の四日には、明治座に七草会のヴェデキンドの出発前半時間を見に行った。八日には、イプセンの小さきアイヨルフを読み終へた、と書いてある。九月の末には、露国から来たオペラを三日見に行っている。セヴィルの理髪師とタイスと、そしてミニヨンと。そんな風だった私にも、或はそんな風であった故に、時にひどく憂鬱になることもあったらしい。こんなことが書いてある。

「お前にはまだ少しでも希望と云ふものが残って居るか  
お前は希望と空想とを混同しなかったと断言出来るか  
お前は生活が何等かの意義の基に築かれて居ると信じるか  
お前は仰ぎ見て絶望に悶へることが決してないか  
お前は地をかいま見て慄えすくむことがないか  
お前が今地に尚も地下にまでも落ち込んでゆくことを

お前自身意識しないと断言できるか  
お前の生への執着が只々生きること  
只々それだけであったとは気がつかないと断言できるか  
お前は気狂になりつゝある  
お前はそれでも死ぬことを願はないのか  
お前は死ななければならない  
お前は今、今寝らなければならない  
まだまだ時はなかへ来ない!」

これが、私が今ある為に必要な苦しみであったかも知れない。或は次にくる恐ろしさの予感であったのかも知れない。何故なら、其の二日後に、綾さんの事件<sup>211)</sup>が始まって居るからである。而してその事件が其後半歳の間、自分を苦しめて居るからである。九月二十七日の処に、夕方、綾さんから電話だったので、上野の××に行って会って来た……と書いてあるが、この事件は思ひ出しても不快だから、又長いことだから、気がむいたら書くことにする。十一月四日に若者座のゴーストを見に行っただけで、十月十一月は、そんな事件の為に落着かない日が多かった。そして、十二月の二日になって、私は此の事件から全く手を引いたのである。》

## 二十一日

朝から久頭と梅子叔母様の処にゆき、自分は一人で湯地をたづねたが、沼津に行っとかで留守。午後山へ帰ったが、上原が名越に居るらしいので、名越に夕食前出かけてうまく尋ねあてた処、昨日何処かへ出かけて、明後日程には帰るとのこと。虚しく帰る。

---

## 友秋<sup>212)</sup> 様

君だからこんな愚痴も云はして貰ふ。昨日午後、突然風のように清印が舞ひ込んだ訳だ。僕は書物をして居たので、思はず家のものゝ取りつぎに対して渋い顔をして見せた。セイジルシは二時間近く喋って行ったよ。幸ひ僕は昨日鎌倉に来ることになって居たので、それでもそれだけで済んだ訳だ。若しもさうでなかったなら、僕は其上何時間苦しめられたか知れない。清印はよく喋ったよ。これだけで君は大概察して呉れるだらうけれど、それでは僕の愚痴がおさまらないから、怠<sup>(退)</sup>屈でも聞いて貰ふ。勿論清印のことだから、まとまったことを喋れるわけもなし、何処で聞いて来たのだから分らないが、まるで他人から口うつしであることが見えすいたようなことばかり、聯絡もなく喋り立てるのだ。

而も云ふことは大きい。曰く人生観、芸術、手もつけられない自惚! 其上ロダンが何

うのこうのと云ったよ。馬鹿につける薬はないと聞いては居るが、只々呆れるばかりだ。例へば斯うも云ったよ。「ね、劣等宗教……こんな専門語を使ひますがね……例へば成田の不動さんみたいなところに盲目のようにおしかける民衆を見ると……えゝ、まったく胸が悪くなりますね……」そして、いかにも超越したらしい様子をして、一寸もったいをつけて、さて心に憐然たるもののある如く、「あゝ、君世間の奴等がほんの少しでも惻巧にはならないもんですかね。全く俗人どもは何が何だかさっぱり解っては居ないで、只々生きてる為に生きてるんだ……」と、そんな風に吐き出すように云って、得意さうな目で僕の微笑を待って居るのです。で僕は、清印が喋り度いだけ喋らせてやらうと始めから腹をきめこんで、大概までは只うん——と聞いて居たが、それでもあんまり<sup>(退)</sup>怠屈すると、一つ豆鉄砲を喰はしてやる。処が真面目に何処までも議論したところで、まるで解らないことを知って居るし（而も悪いことに、もしそんなことをすれば、又例へば君の処へ行つて、僕が云ったのだなどとはそぶりにも見せず、まるでとんでもない意味の処へ、平気で僕の言葉だけでおぼえて居て、一構へやりだすのだ）。さうかと云って、皮肉が感じられるような人間ではなし。仕方がないから、僕は思ひきり突飛な思ひ付きを、突然、なるべく相手の予期しないような隙間に投げつけてやる。例へば清印が得々と人生を論じ芸術を云々するような時に、突然、「君、一寸待ち給へ」と出鼻をはたいて置いて、「君は蝎と云ふ虫を知って居ますか」と云ふでせう。それから僕は実際は蝎と云ふものを知らないのですけれども、そんなことは少しもかまひません。僕は次に自分でもあやしいような、珍奇な鳥の名前を持ち出して来る。そして、前の蝎と比較でもなければ、何とも解らないようにちゃんぽんに喋ってやるのです。僕は其時、豆鉄砲を喰った鳩のような清印のとんきよな顔を見ると、ほんの少しばかり<sup>(退)</sup>怠屈がしのげるんだ。何しろ、あの種の人間は、自分で解らないような事でなければ尊重する価値がないと心得て居るのだから。だから、清印は僕にはなか——尊敬を払って居るらしい。恐らく清印に一目おかれて居る人は沢山はあるまいよ。全く有難くもない。もっと——書くことはあるけれども、君も<sup>(退)</sup>怠屈だらうし、僕もあまり愉快ではないから、又気のむいた時にいつでも書くことにする。

二十二日

○○兄

新聞で大概は知られたことと思ひますが、末の叔父<sup>(柴山)</sup>（直矢）が、昨日突然乗組の潜水艦と一処に、飯屋の沖に沈んでしまひました<sup>213)</sup>。昨夜は蒸々して寝苦しい程でした上に、十二時前から夜明までに四五通も、殆ど一時間おき位に電報が舞ひ込んで——それでも私は、無精たらしく、起きて電報を見ることもしませんでした。其上、何うしたのか、そんなにもしげ——電報の声に起されながらも、不思議に気にもかからず、別段何等の想像さへ思ひ及ばなかったのですが——殆ど熟睡することが出来ませんでした。そんな

訳で、私は今日もふだんのように起きて、それから電報と新聞とを一緒に見たような訳です（折角書き出しはしましたが、だん――客がたて込んで来て、落着きません。急ぐことでも、書かねばならないことでもありませんから、後にゆっくり書き直すことにします）。

## 二十九日

ごったかへしたような、それで居て空虚な日を暮りはじめてから一週間になる。而して、今日夕方、母と兄と共に東京に帰って来る。昨日今日、鎌倉の残暑は珍らしく真夏にかへって、九十度<sup>214)</sup>を突破し、無風滞<sup>〔帯〕</sup>に入ったかと思ふように、黙って室の中に居てさへ汗がにじみ出る。

東京に帰って見ると、驟雨があつたらしく、土が程よく潤って、時たま吹く風は冷えへする。庭には、いつのまにかそこにもここにも、こほろぎが哀れな声をコーコーコーとなく。長かった一週間、明日から落着いてほしいものである。二十二日以後のことを思ひ出すまゝ、に少しづつ、毎日ぼつ――書いてゆかうと思ふ。

《二十一日の夜から二十二日の朝にかけて、次ぎ――に電報が来、新聞も亦同じことを知らせる。小さい叔父（直矢）が乗り込んで居る七〇号潜水艦が突然、二十一日午後飯屋沖に沈没。乗員の四五が偶然助けられただけで、八十名の乗組が総べて三十三尋の海底深く沈んだのである。早くも見舞の客が入り交り立ち交り来る。新聞記者が報攤<sup>〔執拗〕</sup>に攻め立てる。上原が来てくれる。

二十三日――朝、種々の新聞を買はせて記事を読む。新聞記者なんて、よくもこんな出鱈目を、誠しやかに書き立てることが出来ると思ふ。相変らず朝から見舞客を受けるので忙がしい。電報、書状の控を取るだけでも一通りではない。

二十四日――昨夜は蒸々と暑く、時々目覚めたが、開放しの二階には、静かな月が深くさしこんで居ただけで、いつの間にか又寝て居た。朝から細井のおやちさんと愛子サンが来て、午後三時頃までも居た。家の者達は皆思ひ――に亢奮して居た。怒るもの、蔑しむもの、責めるもの、晒ふもの。二人が帰って後に、一昨夜神戸に立たれた大きい叔父（昌生）が帰って来た。併し新聞紙上の報告以上の何者も別段なかった。今日となつては、叔父の死は殆ど確実となつた訳だが、同時に自分は「叔父」である故に、此の事実をすら稍もすれば軽く見過ぎ、卑下して居たことに気がついた。全くそれ以上に悲惨な事実である。ひどく雷が鳴ったが、そしてある程の雲が空を被ふたが、遂に雨も来ずに過ぎ、後は暑く、夕には身もたるむ程に一曾蒸し返す（夕盞は首相加藤男<sup>215)</sup>の死を上げる）。

二十五日――もう百時間近くもなり、愈々死んだことを皆が皆確めるような心になると、不思議な不決定の不安が過ぎて、空虚な安心がやってくる。同時に皆気がゆるんで、ぼんやりして居る。客が来なくなつてしまったのも、そんな心を益々空虚にする。救助

工事が全くはかどらない為に、一つには加藤首相の突然の死から必然の結果、政界多忙の為に、遭難記事は全く隅の方に追ひやられてしまふ。ほんやり新聞をみつめて居ると、尾崎喜八の名で詩が出て居た。

——充実しきって熱く輝き

凝然と緘黙するもの、苦しい程の美

無量の電気は刻々に蓄積され

膨脹する内部の力に

因陀羅網のきつい結び目、照りに照る

あゝ、その輝々たるいましめが切れ飛んで

ついに歴乱と爆発する時

——私は異常な美を雷雨の前の樹木に見た。また、私自身の詩作の前に、けふも感じた

尾崎君。そんな申訳けのかほりに、そんな時に出来た立派な詩を、一つでいいから見せてほしいものだ。君が頭のいい人だと云ふことだけにして、今迄僕は君を未知数の中に押し込んで置いた。即ち君には一つの希望がかかって居たのだが、こんな空虚な自己感激に安く満足して居るなら、僕はもう過去の已知数として君の名を葬ってしまふばかりだ。

---

久米民十郎がわざ／＼訪ねてくれた。雲が多い。

二十六日——すっかり暇になってしまつて、ほんやりして居る処へ、不二磨さんが、元<sup>216</sup>さんが十二時半に亡くなったことを知らせて来た。久顕さんと三時過ぎ、島村さんに行くと、親戚の人々が大分見えて居る。又々種々なことに時を追はれる。夜の九時に納棺式をすませ、十二時過ぎて帰る。月明く星稀、風よし。若いものの死は一しほいたましい。元さんは長患ひに腹せられるだけ腹せてしまつて、すっかり変り果てゝ居た。

二十七日——無性に帰り度くなって、十一時十四分の汽車で一人東京に帰る。秋晴れの深い空から、野分めく荒々しい清風が快く車窓から吹き込んだが、横浜につくと、ここは急に盛夏に帰って、何処からとなく塵臭がむせぶような香を以て迫って来る。東京の白日は、晩夏らしく樹々の黒ずんだ堅い葉を、屋根を、壁を、白く鋭く光らせる。家に帰って、只一人、よい昼寝をとることが出来ただけでも、小さな慰めには足りる。

身も心も勞れた

秋晴の美しい日

野分めく風の日

無性に帰りたくて  
独り東京に帰って来る  
東京に帰ったとて  
労れが癒えるわけでもなくとも  
それでも午食の後  
一時間の全き午睡が  
幾分頭を軽くする  
併し音枝が来て喋り立て  
日暮に母と妹が帰り  
愈々再び立つ前に  
惣ちゃんがひょっこりやって来る  
そんなわけで  
九時四十分の汽車には乗り後れ  
十時四十五分まで  
堅い東京駅の待合室で  
ぼんやり時の過ぎるのを待ってはみても  
あゝ、身も心も慰まない  
人々は無遠慮にも  
カラ――とあたりを馳け廻り<sup>(駈)</sup>  
あくびをし  
さてまた此の退屈な眺めを  
活気づける何者もない  
叔父の死が  
漸く決定的なものとなり  
遠くから  
叔父は死んだのだ――と  
少しは落着いた時  
又も、いとこの  
変り果てた死顔を見ようとは！  
夜、月は雲もない空に  
明るく高く昇って  
風もない  
じり――と暑い  
鈍い汽笛  
蒸気の震響

無数の車輪の廻転，疾走  
足駄の音  
話してはない無作法な  
声の音，音，音  
煙草  
あくび，急心，懸念  
尚もいやらしい  
しあ——とした  
くど——しい若い娘等の独り出  
只おとなしいのは，赤ん坊  
腕に背に，響の上に  
震駭の上に  
安らかに，寝る，寝る  
あゝ，此の駅に  
夜が更けたなら  
ここに渦巻が消えて  
静寂と不動と  
そして真実が来るとき  
あゝ  
それこそ恐ろしい光景  
恐らくは土が墓が  
総べてのものを  
支配し誘導する時である  
幸にして私は  
その全き夜半を知らないのです

これは，東京駅の待合室に汽車を待つ間，そのあらゆる雑踏を，倦怠と疲労とのヴェールを透して追った幻想，幻像のしるしである。

終列車で又鎌倉に来たのである。

二十八日——九時から島村家の葬儀に列する。二時半出棺式，三時半出棺。晩夏の白い日が風を殺し，土を焼き，寒暖計の水銀を九十度の線の上まで突き上げる》

三十日

一日家に居て，何もしない

三十一日

事件に事件が次いだので、「考へ」が何処かにかくれてしまふ。八月のメとして、詩作の少なかったことを悲しむ。夕食の後に江波の家に出かける。

九月一日

十四日

全く予期しなかった二週間の追憶を簡単に記さうとする。

九月一日　考へれば、この咒はれた日は、既に早くここに始まった如く思はれるとは云へ、静かな霞んだ朝日が、総べての秘密を堅く守って、何の前兆も予期も許さないものゝように明けはなれたのである。併し九時には雲が出て、争はれぬ二百十日（二百九日）が、風と雨とを以て、始めの挨拶を私達に送る。而も三十分の後には、悪魔らしい周到さを以て、暫らく美しい太陽と快い秋空とが次ぎ送られる。そして十二時前に突然、今度の地震が来たのである。そしてこの地震が今日まで二週間の間に、私達の生活の全面を、まことに風船玉よりも価ないものの如くに弄んだのである。今まだ頭の中には、次ぎ次ぎの断想が雑然と飛びまはって居るのであるけれども、兎も角も、体は幾分落ついたので、事実だけを記して行くことにする。

十五日、記。

一日の正午前に地震が来た。私は室で新聞を読んで居たのであるが、大変な上下動で、併しいつものように直きに横振りになるだらうと思って居たのに、上下動のまゝ益々はげしくなつて、しまひには自分が腰かけて居る椅子ごと飛上るようになり、そのうちにあたりの小さなもの等が机の上から、本箱の上から、がらへ――転り落ち出したので、驚いて新聞を手にしたまゝ、次の室に出た。次の室に出た時には、既に奥の間の大きな箆子<sup>〔箆〕</sup>がひどい音を立て、倒れかかり、壁土は、ばらへ――ずり落ちて居た。庭の真中に兄と母と妹とが、赤ん坊をしっかりと守って蹲って居た。其時私は室に居て、静かに立つことが出来ない程に大ゆれにゆれて居た。私は直ぐにも飛び出さうとしたけれども、同時に私は縁のはずれに瓦ががらへ――落ちるのを認めて、ためらはずに居られなかった。

併し結局私も亦足袋はだしのまゝ、庭の真中にとび出した。私はそんなにして飛び出してからも、案外心は落ついて居た。

<sup>〔欄外に記す〕</sup>  
〔独逸教会の非常鐘が、ぞはへ――と騒がしい地震の間に正しく鳴り続けた。私達が裏庭に廻って見ると、教会の高い塔の頭はそのまゝ崩れ落ちて、ぶっきられたようになって居た。〕〕

瓦は益々落ち、家全体がきしみながら大きくゆれて居た。私は庭をあっちこっち歩きまはって居た。地震は時を措いてやって来た。併しそれはだんへ――に間遠になっていっ

た。私達は用心深く家に上って名々が少しづつ、机だの椅子だのを外に持ち出した。そして、庭の高い樅の木影に膳部を揃へた。丁度昼時で、座敷に膳部を揃へた処だったので、それらは持ち出しはしたものの、飯の上にも、菜の上にも、壁土だの、埃だの一面に落ちて居た。それでも兎も角、私は地震の中でそれらをそのまゝ食べはじめた。兄などは喉口に入らないと云って、食べようとはしなかった。私は食事が済むと、すぐに上着を着かへて街に出て見た。上村さんも、荒川さんも、三井さんのどえらい塀も、石造、煉瓦造の塀は、すべてあとかたもなく壊れて、道の両側に倒れて居る。

岩佐さんの前を右にまがると、路傍の家々は傾いて、屋根瓦などもひどく落ちて居る。人々は戸板だの畳だのを少しばかり道の真中に出して、その上に炎天に照らされて足をなげ出して居た。私はそんな人々の中を、見物人らしく呑気さうにぐづぐづ歩いては居られないので、用ありげに大股に街を歩きまはって、それでも大体の街の様子を見て歩いた。平生入って見たこともない大きな屋敷などが、塀がすっかり崩れた為に、中まで見通されたりするのが不思議に思はれた。私の処の家は、随分荒れて居たけれども、古い大きな長屋門は瓦一枚落ちず、黒い板塀も損はれなかったもので、通りから見ると、如何にも確りして居るらしく平然として居た。家に帰ると間もなく、女子学院<sup>217)</sup>の方に黒い烟が上がった。中六番町の薬学校<sup>218)</sup>から火が出たのである。西南の風が吹いて居たので、烟は私達の家をほんの少しばかり外れて、東郷坂の上をはすに飛んで行った。水道は早くに止って居た。それで街は急にどよめきたって、人々は不安らしく往ったり来たりした。後に聞くと、地震の後に直ぐ高台に登った人が、二十四箇所<sup>219)</sup>に烟の昇るのを見たさうである。地震はまだ一時を措いて、次ぎ次ぎに人々の心を不安にした。で、私達は、小さな子供が居たりするので、今日一日、外でねる為に、樅の木の下に物干ざほと幾枚かの毛布を以て、テントを張ることにした。其の間に、彦が相変らず正直さうにぶるぶるふるえながら、見舞にとんで来て忙がしさうに帰って行った。奥山も貞次郎も同じように汗にぬれて飛んで来て、勢よく飛んで帰った。そのうちに伊藤が、郵便局の用をすませてかけつけて呉れた。而して此の騒ぎの間、伊藤が私達の為に骨を折ってくれたことを、私達は何んなに感謝して居るだらう。伊藤は私達のテントを完成して呉れた。

そんなことをして居るうちに、どんどん時がたって行った。火事は水がきられたので、又一つには人々が地震を恐れて居る為に（安政の大震の後、こんな地震を知らない東京の人々は、そして安政の大震をも話でしか知らない人々は、此の大地震がどんな風になって行くかを、思ひ／＼にあらゆる恐怖心の上に築き上げて居ただらう）、燃えるがまゝに只燃え移っていったのである。そして夕方までには、北の方に、二七通りにまで燃え伸びて、三番町にまで伸び、それから風が西に変わったので、三番町を東へ東へ飛び移って行った。私達は併し、此の火元には案外に楽観して居たのである。其の間にも私達は早く帝劇、警視庁が焼け、丸の内一たいが火になってゆくこと、赤坂、田町の辺に更に

大きな火事が起ったこと（赤坂の火事は、丁度私達の処からは風上に当って居たので、遠いけれども真黒な烟が、私達の上をどん／＼飛んでいった）。それから、神田方面が又火の海であること、又水道橋の砲兵工廠<sup>219)</sup>が火をあびたらしく、時々、ドーンと物凄い爆音の上るのを聞いて居た。日暮前に中井さんが来た。東京駅に居たとかで、直ぐに日本橋の兄さんの処へ行くと、已に火事に焼き出されて、一同身を以て避難して居たので、其のまゝ本所の兄さんの処へ行かうとしたが、両国橋の向ふ一面火の海で、何としてもゆかれないので、帰って来たのだとのことだった。武さんも、比日谷<sup>〔日比〕</sup>に居たとかで、私達の処へ逃げて来た。其うちに、風が更に西北に変わったので、私達の家は、いつまでもしつこく燃えて居た木澤病院の火の粉を、まともに浴びるようになった。

私達はそれまで、荷物を持ち出した処で、運べもしないものかと思って、荷物には全く注意せず、ほんの大事なものをだけ取り出して持って居ただけだったが、愈々立退かうとすると、母や妹がそれでは気がすまないらしかった。それに中井さんや伊藤なども、出すだけでも出した方がいいと云ふので、今度は忽、男手の多いのを幸ひ、夜具、布団から簞子<sup>〔簞〕</sup>、火鉢まで手あたり次第に庭の真中にひきづり出したのであった。そして、日暮と共に母と妹と下女とを、赤ん坊に必要なものを乳母車にもたせて、鈴木<sup>〔羅〕</sup>の角に避難させたのである。だがこんな風にくだらない事実を拉列<sup>〔羅〕</sup>するのをやめにして、私達は結局もてるだけの荷物をアルウキンさんの前まで持ちこんだのである。其の時はもう、アルウキンさんの前の通りは、雑多な避難民と荷物とで騒がしく入り乱れて居た。泣顔の娘も居る。電話機一つを背に負って、黙ってとぼ／＼と人を分けてゆく上さんも居る。而して、夕は遠慮なく迫って来る。その間に川村や伊藤や中井さんなどが、家の屋根に登って一々火の粉を消して居た。庭にも荷物の上にも、火の粉ははら／＼するように飛んで来た。お倉にも火の粉がとんで、屋根の廂が燃えはじめた。私達はいそいで倉の屋根に登って、それをも無事に消し止めた。そして居るうちに、木澤病院の火はだん／＼に燃え尽して、静かに赤く弱くなっていった。私達はすっかり楽観していいように見えた。その間に、火の手は富士見町通りに出て、大橋図書館<sup>220)</sup>から伊井さんの屋敷と、幾つかならんだ倉庫を焼き移って、非常な勢で五番町の方にぬけ出ようとした。私は岩佐さんの角まで出て見た。人々は、男達は、皆この角に集って、小さな努力を尽して、火を此の通りで止めようとして居た。併し火は、愛生病院から伊達さんを焼いて、岩佐さんの本邸の方を裏にまはって、もう先きは五番町の方まで出たらしかった。そして、此の時には、風は益々はげしく、火の手が益々速くなって居たので、火の海は、二十倍にも五十倍にもなっていた。而して、遂に私達の家並のはづれの飯田さんにまで燃え移って居た。私達は今は虚しく隣の荒川さんの裏庭に出て、崖下から向ひの高台まで只一面、赤黄色い焰の波を見はらして居た。とう／＼大妻技芸学校も焼け落ち、上六小学校にまで燃え広がった頃には、風が全く東北に変わって居たので、私達の家はもう、大粒な雪のような火の粉の中に埋まって居た。私達はここまで見とどけて、遂に引上げたので

ある。もう宵の十時はとうに廻って居た。夜中の十二時から一時までの間に、私は私達の家から二十間とははなれない処に立って居たが、其間私は物凄い音と風の呻くのを聞いただけだった。自分達の家のみらへとたわいなく燃えるのを見て、何うすることも出来ないで居た。真夜中、街は不思議な明るさに照らされて居た。燃えさかる焰のかげに、半月が赤くただれたように顫えて居た。私達は斯うして、火に追はれ追はれ荷物と赤ん坊とを守って、アルウキンさんの前から女子学院の角に、女子学院から松平さんの塀の中へとだんへに移りあるいた。私達のゆく所へには、既に人群と荷物道具とがぎっしりと入り乱れ、ぶつかり合っている。お互がお互をたより合っている、同じような不安の中に行方を求めて居た。私達はもう労れて居た。此の先き尚も追はれるならば、赤子を守るのに必要なものだけを提げて、身だけ逃れようと決心した程だった。その時に橋本が、此の雑踏の中に私達を訪ね来て、勢をつけてくれた。私達は明方の三時になって、榎本のつてゝ荷物と一緒に土手三番町の越野氏の邸内に落ついたのである。そして、朝までほんの一時間程、不安な眠をまどろんだのである。

十六日、記す。

何を云はうにも、私は今ひどく労れて居る。根氣と云ふものが、杉の葉先の一粒の露程も私の中には残って居ない――。

だが、兎も角も、そんな風にして、二日の朝が皮肉らしく晴れへと明けたのである。そして、私達は越野氏の家を五時には辞して、二七通を通って家に帰った。二七通りを朝鮮留學生の寄宿舎の辺まで来ると、もう先は富士見軒の辺までも一目に見渡された、焼け残りのいやな臭気が鼻をついた。家も塀も何一つ影を止めたものはなかった。其処ここから烟が<sup>ママ</sup>労れた目にいたくしみた。電柱は折れて、その先が怪しげに細い電線に支へられて、<sup>宙</sup>沖に浮いて居た。折れた電柱の先には、まだ火が消えないで、少しの風にもばちへと音を立て、火の粉を散らした。東郷坂を降りようとする<sup>平八郎</sup>と、東郷さんの母屋だけが、只一つ焼野の中に岩のように残って居る。勿論塀などはまるで焼けてしまっている。そして、東郷さんが通り側の櫓子の中に一人軍服を着たまゝ、腰かけて居た。で私達は外から呼びかけた。「おちさま。お怪我も御座いませんでしたか」。「おゝ、えらいこちゃったね。お前んとこの焼けるのが、よう見えちゃった。気の毒ちゃったな」。東郷坂の中程の処は、両側から家が倒れかかって路をふさいで居た。で私達は燃えさしの板塀などの上を、うまく飛び移らねばならなかった。少しさきには独逸教会の径三四尺もある大きな杉の木が、真一文字に途に倒れかかって居た。何処を見ても、私達の記憶にあるようなものは一つもなかった。街は一面燃えさした残火と烟と灰とだけで、何処までも只一目に見透された。

私達は、今迄家々が並んで居た為にまるで知らなかった石垣を向ふに見たり、広い平らかな小学校の中庭の跡を見下して、不思議な気がした。生木などは只一本の黒こげの

棒になって了って居た。太陽は、低くかげろふ烟の後に、月よりも鈍く赤かった。坂を昇りきらうとすると、足立さんのおばさんが、低い石垣から煤けた顔に頬かぶりして、待ちかまへたように呼びかけた。「まあ、口惜しう御座いました！」全く口惜しそうだった。そして無理もなかった。火事が木澤病院にまで行った時に、足立さんでは已に火事を広めない為に、昌ちゃんなどが駆けつけて消防につとめて居たのである。而して愈々字義通り自家に火がつくまで、足立さんでは立派な自信を以て、何人かの若い者が屋根に登って火を防いで居たのである。そして、三つの井戸が全部くみ乾されたけれども、まだ火の粉は容赦なく飛んで、遂に家を焼いたのだった。そんなわけで、足立さんでは、おばさん自身が、愈々火事になってから、重要書類を負って出た他には、何一つ取り出したものがなかった。

私達が家についた時は、私達の家<sup>(跡)</sup>の長家門だけが只一つ、瓦一枚落ちずにヤケドもせず<sup>(厄)</sup>に立って居た。それは、殆ど奇責のようなものだった。長屋の川村の家<sup>(厄)</sup>に危介になって居る爺さんが只一人、夜中、此の火の海の中に踏み止まって、努力のあるかぎりを尽して此の門を守って居たのである。爺さんの目は一夜中烟にいぶされて、「ただれ面」のように腫れて赤くなって居た。目頭にも目尻にも、豆粒ほどの脂のような目やにがたままって居た。門をくぐると、私達の家は見るかげもなく、柱一本残さず燃え落ちて居た。むっと熱い風烟が鼻を目を突いた。焼跡からはまだ――赤い焰が風に煽られては、なめずるように立ち昇った。柿の木は黒焦の枝先に、同じような丸焦げのしなびた実をぶるさげて居た。木々の葉はかさ――にかわいて潤れて居た。それでも爺さんのおかげで、私達が庭に置きざりにした荷物は、殆ど全部無事に残って居た。黒い板塀も、昨日張って置いたままの毛布のテントもそのまゝ残って居た。火事は尚も麴町通を盛に燃え移って、まだ――消えさうにもなかった。風はすっかり東に廻り、幾らか南にふれて居た。そしてだん――に南に強くふれて、結局大きな輪を画いて火元に帰るような風だった。私達は焼跡の寧ろ安全なのを思っ<sup>(ママ)</sup>て、越野氏の処から一日がかりでぼつぼつ車につんでは、私達の荷物を焼跡に運んだ――だが此の先きを書かうにも、まるで根気がない。で後に沢山の雑誌などにも、今度の地震と火事と鮮人騒ぎに就いても、私の労れきった記録以上の精しい報知が出ると思ふし、斯<sup>(ママ)</sup>ななに<sup>(ママ)</sup>して一日に一日の分も書けないようでは、一日に一日が追はれて、結局つまらなひことばかり書いてしまふようなことにもなるだらうし、又いつかの機会を待つとして、簡単に私達が目黒に移ったまでの間の成行と事件とを<sup>(羅)</sup>並列することにする。――

二日の夜は、鮮人の暴挙に脅かされて徹宵警備。三日、食糧の全き欠乏、不安から遂に意を決して、午後一時に番町の焼跡を引上げる。前後して、兄と伊藤とが荷と一緒に馬力車で目黒の小城さんに行く。私は母と妹と赤ん坊と、而して「さわ」を導いて、徒歩、渋谷の木島さんに行って宿る。

途中風雨烈しく困憊。木島さんで湯をあびて、食事らしい夕食にありついて生き返っ

たのもつかの間、夜半には鮮人の不法な流言に又々眠を妨げられる。明けて四日、遂に目黒の小城さんに難を避ける。五日未明に伊藤を鎌倉に見舞にやる。六日、兄と焼跡に行く途中、恵比寿の駅前で保ちゃんに逢ふ。保ちゃんは菊名からあやうく逃れ帰ったのだった。焼跡に行くと、佑さんが水兵四人を指図して、焼け残った荷物をかたづけて居た。佑さんは、パンだの<sup>(缶)</sup>罐づめだの沢山の食糧品を持って来てくれたので、昼食のかはりに焼跡でパンをかじって、皆一緒に目黒に帰って来た。晩になると、あはれっぽく電燈が灯った。明朝早く、荷車を引いて食糧品を貰ひに行く手はずをきめて、佑さんは水兵等と夕方帰って行った。七日には、朝七時に芝浦に荷車を引いて行った。米、砂糖、味噌、醤油等しこたま積んで、水兵七人とかはるへ、目黒まで引いて帰る。浜さんのお兄さんがわざへ米だの梅干だのを以て、目黒まで尋ねて下さる。譲二叔父様も来て下さる。夕方貸家をさがしまはったけれども、どれもこれも昨日ふさがったとか、今日きまっとか云ふ調子で、更に駄目。八日には、ベンガラ社の跡を見たが、已に人が入るらしく、深町の家を見に出かけたが、ひどく破損して居て駄目以上。お玉様が小島の治をつれて来られる。ベンガラ社跡の隣りに貸家を見つける。伊藤が鎌倉から帰って来る。鎌倉一同無事。九日、伊藤と佑さんと保ちゃんと四人で荷車二台を引いて、焼跡に荷物を取りに行く。晩雨になる。十日、雨。佑さんは艦に帰る。十一日、引越し。十二日、渋谷の方に食糧品など買ひながら、木島さんに御礼に行き、五島さんの処によって春子さん達に逢って来る。十三日、朝から兄と田辺サンに行き、出科サンに行き、小石川の叔母様の処に行き、大学をぬけて美校に行く。そして、万世橋に出、<sup>(和泉)</sup>泉橋向ふの川上サンの処に行行って帰ったが、足は豆だらけになって了った。晩、雨にぬれて佑さんがやって来る。

#### 十七日、記

十四日には、昨夜からの雨がどえらい雨になって、一日家に引込んで居る。佑さんは朝の九時には帰ってゆく。十五日も亦天気は気まぐれに、降ったり止んだりする。而も降る時は、土も堀れるように降ると、後は秋らしい空が深く澄んで、ぎらへと輝くと云った、実に妙な天気だった。十六日、爽やかな秋日、秋風に明ける。午には田辺さんの英サン、国サンが白砂糖をもって来てくれる。三時頃から、英サン達を送って道元坂まで出る。丁度三人で、しるこ屋に入ると、それは天一杯の水桶の底がぬけたかと思ふような雨が急に落ちて、あたりが真暗になる。けれど、二十分待つうちには、ぱったり止んだので、英サン達は渋谷から電車で帰る。十七日、晴天。朝皆で道元坂に出る。惣ちゃんに逢ふ。自分だけ別れて、渋谷から山手線が昨日から通じたので、巣鴨まで廻り、巣鴨から本郷三丁目まで電車で行って、江波の家の跡に行つて見る。弓町の方に避難して居たので近いし、尋ねて行つて来る。一時間程も居て、歩いて運初橋に出、一寸谷中の木山の処へよったが留守なので、置手紙して、電車で道灌山下にで、建昌先生の処に行く。安達が居たので、倉沢の下宿を尋ねたが留守だったので、先生のアトリエに引

かへして話すうち、大粒の雨がぱら―来たので、止むのをまって田端から電車で帰る。今迄小城サンの方で取って居た配給物を、今日から直接私達の処へ持って来てくれるようになって、村の人達が三四人来て、味噌、じゃがいも、<sup>(缶詰)</sup> 鐘噴などを置いていってくれる。私達は其中に一包の慰問袋をも貰った。中にはメリヤスの厚いシャツが一枚、手拭一本、鉛筆十六本が入れてあって、岐阜県の某とかいてある。私達は当時の惨状を思ひ、地方の人々の同情を思つて涙ぐむ。

#### 十八日

快晴。午後久顕サンが、鎌倉から帰って来る。地震の後のいきさつの間に、どんなに久顕サンに帰って来て貰ひ度かったらう。だが今では、もうとりわけて久顕サンを要しはしなかった。とは云へ、私は嬉しかった。日暮前に久顕サンと道元坂の方に出る。用もなかったのだけれど。途中私達はお互に二人だけで、必要なことをのべつに喋りあった。そして二人で安心することが出来た。

#### 十九日

久顕サンと一緒に伊藤とサワとをつれて、番町の焼跡に行く。今迄身のまはりをはなさなかった書籍、絵画、オモチャ、壺などが何一つなくなると、そして今ほんの少しばかり落ちついて見ると、それがどんなに恐ろしく、不安な心を強ひるのか！私はそんな淋しさにはとても堪えられない。で兎も角、生き残った五六十に足りない書籍でも、側に置いて幾分でも以前の心に帰らう為に、僅かに持てるだけの本を抱いて帰って来る。明日から毎日でも焼跡に行つては本を運ばうと思ふ。帰って来たら、佑さんが出て来て居た。

#### 二十日

七時半には、佑さんと伊藤と三人で荷車二台を引いて焼跡にゆく。番町についた頃から一面に雲って来たが、荷造りを終へて弁当を済ませて引き出そうとする頃、とう―ぱら―と雨が降って来る。たいしたこともなさうなので、引き出す。途中どうやら降られもせず、三時には目黒まで荷を引いて来る。と同時に、雨が降り出す。

湯にかかるると体は極度に勞れてだるい。晩まで霧のような細かい雨が降ったり止んだりする。

#### 二十一日

秋空、真澄み蒼ぐみ櫟の木、群樹の中にひとと高く、爽やかな風がさら―と音立て、鈴かけの葉が白く光るけれども、先達来の過勞に、頭の平衡を失つた人々は、空虚な心を些かな事にまで鋭く苛立てる。で私までも皆に接近すれば直ぐにも、不満と不安に襲

はれると思ふようになって了ふ。

午後二時には、佑さんが帰ってゆく。

## 二十二日

だらしない雨が降り続ける。

佑さんが突然ひょっこり帰って来る。

先達からはがゆい程馬鹿になった頭を、より馬鹿げてゆくことから救ひ出す為に、事件の多い中に暇さへあれば少しづつ、読んで来たゴーリキの懺悔を、今日二週間目で読み終へる。私が以前に英訳で読みかけた同じ人の Mother から見ると、まだ――読み辛かった。何故なら、懺悔そのものの目的が簡単で明瞭であるにかかはらず、その思想が非常に複雑であり、殊にその表現があまりに暗示的だからである。そのくせ私は、「表現」は絶対に暗示によって活かされなければならないことを、ストリンドベルヒの多くの作から強く教はって居り、信じて居るのだけれども。

ヒラリオンにした処で、サベルコにした処で、教父アントニアス、クリスティナ、それから教父ヨナッシュ、ピーター・ヤギッチとミカイロ。彼等の会話は、決して私にはすら――とは解らなかつた。それから、ミカ。ミカなどは私の頭の中に、奇異な変質的な人格の、ほんの断片としてたたき込まれて了つたようである。けれども、私は現在の私を半分は攻めて居る。そして再びよりよく読み得る機会を、近いうちに持つようにしよう。それから、更に Mother をも読み度い気が切りにする。

日暮前に雨が晴れて、夕は美しかった。午後申井さんが来て、夜八時半頃まで居たので、帰る時は兄と二人で道元坂まで送ってゆく。月が射すように鋭く美しい。併し斯んな月夜にも、私達は提灯を持って出なければならない。夜警団の各結処の前では、一々声をかけて挨拶して通る仕末である。こんな物騒な世が早く過去になるように。家々の屋根の影が動くのが、人一人通らない夜を寂しくする。屋根には露がひどく降りて、月の光にキラ――と銀色に光った。そして夜はまだ十月にもならないのに、冷え――と寒かった。私達はポケットに手を深くおしこんで黙って歩いた。私は胸がやけて、たまらなく苦しかった。こんなに寒さが早く来ると、そして斯んなにして冬が一足一足私達に這ひ寄るのだと思ふと悲しかった。十時に家に帰りつくと、私は倒れるように寝てしまった。

## 二十三日

一日どんよりと煮えきらない曇日が、初冬の寒さを以て私達を脅かす。

## 二十四日

蔭鬱な雨に暗い日が明ける。けれども、七時過ぎには、私は佑さんと二人で家を出る。風のまにまに斑らな雨が、言はば迷子犬のようによろ――と横ざまに降った。私達は恵

比寿の駅から電車で品川に出、品川で汽車に乗り換えて佑さんは田浦<sup>221)</sup>へ、私は鎌倉に来た。品川駅はお祭日のような人出で、私達は方々かけずりまはって、やっと汽車の入口を見付け出さねばならなかった。そんな人出であるのに、此の沢山の人々は皆暗い顔してお互にひそへ話し合ふか、或は全く口を噤んで黙って居た。品川で汽車に乗ると、本多正震に遭った。私達が出逢ったのは、まったく偶然だった。私が昔の友達にあって、進んで口をきくことは稀である程に、私の生活が彼等の生活から離れて了って居るにも拘らず、こんなことのあった後なので、私達はお互に軽い気持で、懐かしい気持で、お互の驚きや珍らしい事件に就いて、横浜まで話し続けた。鎌倉の惨状は、途中のそれと共にひどいものだった。家には水兵が三人来て働いて居た。丁度家に着いた頃から、雨はなだれのような勢で降り出し、風は賭<sup>賭</sup>者に向ふ牛のような声で鳴り、大きな樹々はおもちゃのようににはじき返された。家の中は何箇所となく雨もりがしだした。水兵等は其処の畳を上げ、戸棚の中のを外に取り出した。私達は金盥<sup>穴</sup>だの馬尻<sup>穴</sup>だの、あらゆる器を以て雫を受けた。嵐は夜になっても、益々はげしく怒り狂った。私達は悲しかった。二十日前の大震火に、何十万の家が三日の間に焼き尽された。十万の人々が崩れ落ちる梁に敷かれ、煉瓦に打たれ、石につぶされた。それで其上に火あぶりにあぶり殺された。何十万の人々が家を失ひ、親を子を失ひ、職を失った。

配給食によって僅かに命を保って居る十数万の人々が、マッチ箱のようなバラックの中に、不安な眠を眠って居る。一枚の板床と布団とを持って居るものは、まだへ幸なのである。こんな風で数十万の人々の心が一斉に平静を願って居るのに、此の暴風雨は更に何を企てようとするのか。私達は暖かい晚餐を取って心悲しかった。恐ろしい出水は、火を見るよりも明らかであり、数万の人々が更に彼等の巢を失ひ、飢に困しみ、来る寒さを咒はねばならないのか。天の意図を計り知らない私達は、そんな強ひられた不信を悲しみ合った。暗い蠟燭の光の下に——私達のどこがアナタには気に入らないのですか。アナタは力あるもの故に、今少し思慮深く、憐み深くあってはくれないのか——こんな不信が十数万の人々の心を捕へるならば！

## 二十五日

嵐の後らしい晴々しい一日。小春を思はせるような静かな南風が私達に——今こそ少しばかり休んだらいいでせうと云ってくれる。<sup>欄外に記す</sup>〔果して処々の罹災者等が水の為に困しんで居る。〕

けれども庭も、又見下す町も、聞くものにはいちへ話し出るかのように、細かに見れば見るほど、何処にでも夜来の暴風雨は痕を残して居る。花壇の草花は横なぎになぎ仆され、そこここに大きな生木の枝が折れ飛んで居る。海は遠く濁って、間遠な浪の音がドーと鳴っては消えた。秋の蟬等が慌しく最後の余勢を貪り惜しんで歌ひ続ける。

あゝ、そして私は昨日の心の上に今日の思ひを積んで、いたづらな「彼」に、おほど

かな微笑を送ります。

---

此の夜、電燈が一時に灯って、明るい暖かい夜を鎌倉の人々は喜んだ。今日は十五夜。外の面は雲もない空に白い月が昇って、澄みきった空気の中に、影と光とがくっきりと、言はば沢山の小さな夜と昼とを隣り合はせたように、面白く入り乱れた。私達は薄の穂を摘み、栗の枝を折って挿し、だんごを積み、芋をふかして、私達の小さな喜びを月に送った。

---

見るものこそ見るだらう  
知るものにこそ知らせて置け  
それは時には一人の存在は、存在の理由と意味とを  
全く一人自身が負ふものとてもかまったことはない  
床下からこほろぎが、こう――と、「時」との默契を守るのか  
迫らず正しくも鳴き続ける

〔×を附す〕

二十六日

夕方、又々大きな地震が人々の心を冷たくする。

二十七日

夕方、大きな荷物と用事とを背負って東京に帰る。

二十八日

又々雨。午後晴れたので、道元坂まで出る。

二十九月

朝から出て、麻布に藤原保国を尋ね、田辺サンに行き、笹塚に行って、夕方帰る。昌生叔父様が出て来られる。

三十日

朝から、昌生叔父様を案内して、中野に上原さんを尋ねる。丁度、川上の伯父様<sup>222)</sup>も来られる。叔父様に別れて、田辺サンに行き、矢来町<sup>223)</sup>に小山が避難して居るので見舞ったが、あいにく葉山に行って留守だったので帰る。雨に降られる。

先達鎌倉から持って帰った、河上肇<sup>224)</sup>博士の貧乏物語を読み終へる。誠に高説である。けれども、私にとってはより以上に興味深い物語であった。そして、そんな方面の専門書に触れる機会と予備知識乃至意欲を持ち合はせない私には、誠に手ごろな本ででもあった。そして、私もなかへ物識りになった。〔――<sup>〔欄外に記す〕</sup>負け惜しみな!〕

## 十月

### 一日

にえくらない天気。一日頭が重い。

### 二日

皆で五反田に家を見に行く。久頭と本田サン<sup>225)</sup>によって、長いこと喋って三田に出る。夕方雨に降られて帰る。関口氏が遊びに来て居る。宿る。

### 三日

朝から家を出て学校にゆく。昼過ぎ、丸の内ビルディングに行つて見る。大変な雑沓。晩には昌生叔父様が来られる。

### 四日

綺麗な一日。昌生叔父様と久頭さんと三人で家を出る。叔父様は艦に帰られる。久頭さんと品川で車を待つ間、松元の処と後藤さんとに行つて、二人で鎌倉に来る。混乱と労役と焦燥の外に、何の慰めもない日を送り出して、茲に一月の余が早く虚しく飛んで行つた。そして其の上、まだへ何とも目鼻がつかない。一月を鎌倉に居て、生活の悪流から脱することが出来るならば!

### 五日

朝のうち、二階堂に湯地を訪ねたが、丁度少し前、東京に出たとかで、留守。おばさんにお逢して帰る。

---

静けさです

ここは全くの静けさです

あらゆる、而もどんな遠い響までが

澄みきつた夜を

遠い灯が貫いて光るように

私の耳もとに這ひよります  
おゝ、私は今迄に  
こんなにも遠い、而も雑然たる響を  
かくも正しく、又確かに  
一々私の耳に聞きわけたことはありません  
それはあの恐ろしい地震の後の  
それは丁度三日の間  
家を追ひ人を追ひ  
あらゆるものを追って焼き続けた大火の後の  
荒涼たる海岸町の、古寺の  
仲秋の  
雲の多い、霧の深い  
午さがりの  
古杉の杜に抱かれて  
止み難く省み顧みる私の心です

〔×を附す〕

六日

終日、灰色の雨が降って、息づまるような日がゆっくり――と、併しやうやく過ぎようとする。

---

〔欄外に記す〕  
〔異端の詩人〕

またも響く両足  
こんな夜が不信者の心に  
どんな悲しい調べを送るか  
「我」が悲しみを蒔くのか  
「彼」が不信を植ゑるのか  
これこそ不信者の一つの又総ての悩み  
されど私は果しなき詩の国を  
あてどなくさ迷ふ旅人  
心、華やかにも寂しく  
「知られざる彼」に憧れ  
おゝ、恐ろしくも澄み渡る心に  
またも響く両足

「我」が悲しみを育むのか  
「彼」が不信を教へるのか  
されど私は到底あてもなき旅人  
「知られざる彼」を崇め  
両の夜を斯くも静かに  
只、華やかにも寂しく行くのです、歩むのです

〔×を附す〕

---

カアレル・カベックの人造人間(無賃労働者)R・U・R<sup>(226)</sup>を読む。あまり興味を感じない。

---

七日 sunday

一日じめ〜と雨が降り続ける。久顕さんは、東京に帰ってゆく。

---

今夜の風の音を聞いたか  
星影<sup>しげ</sup>の濃く澄んだ頃  
千年の杜を狼の群が駆け廻る音だ  
樹々の葉が、草の茎が堅くなったのだ  
やがて霜が降るだらう  
しをんの薄紫の夕べ、肌寒く  
快い哀愁が早く過ぎて  
見よ、蔭鬱な冬が  
彼方から無気味にしょぼ〜と  
小さい灰色の目をしばだたく  
今夜の風の音を聞いたか  
樹々の葉が、草の茎が堅くなったのだ  
暖かい暖炉の前に居て、詩人は  
外の面の闇を荒れる風の声から  
あらゆる自然の姿をさへ知るのに  
俺は又（あはれな俺よ）  
現実から現実への寒い心を  
吹く風に乗って尚もぶる〜と顫えて居る

〔×を附す〕

---

八日

月の夕べ

星の夕べ

窓に倚る処女<sup>おとめ</sup>の願ひ

おゝ、誰人ぞ

窓を打つノックの音よ

私はそなたを待つて居る

蛙鳴く夕べ

おぼろおぼろの夕べ

窓による処女の思ひ

おゝ、そしたら私は

そつとらんぶを引ませう

まだ知らぬそなたを迎へる為に

祭の夕べ

人々が街の明るみへ群れ集ふ頃

窓による処女の夢

今こそ、ふけよ柴笛

高鳴る胸、腕、唇<sup>くち</sup>

おゝ、それにも増して熱い情<sup>おもひ</sup>を！

霧ふかい夜

すずかけの葉がさらさらと泣く時

窓に倚る処女の祈り

おゝ、誰人ぞ、まだ私をおぼえて居るものよ！

あゝ、私はそつとらんぶを消ませう

私の乱れた髪と又瞳は底はれねばならない

〔×を附す〕

---

一日煙のように曇って、湿った冷たい風が吹く。気持が悪い。夕方には風がはげしく、小さな雨がまじって、一しほ寒い。

## 九日

## 輓歌 六首

- ✓塩釜の船津に舟は多くあれどわたる君なく吾<sup>あ</sup>がひとりかも（岡村の三ちゃんへ）  
 ✓不忍の池になく鴨をよみのくにゆ聞きてもますか忍<sup>しぬ</sup>びなく鴨を（青木の光ちゃんへ）  
 ✓名越<sup>なごえ</sup>の木の下露は晴れもやらず土にかへりぬ木の下露は（木下利昌兄へ）  
 ✓由比ヶ浜に浪やは荒れし真帆片帆つゐしものを片帆かかして（五島万千代夫人へ）  
 ✓由比ヶ浜に結びし友垣夢にして三年ふるものを何にと云はめやも（五島万千代夫人へ）  
 ✓生<sup>なまむぎ</sup>麦のなまなまなりに凋るれば身がこと如もあやしかりけり（野間政治兄へ）

## 別に二首

- ✓南天の青き実鈴のしなだれにさ霧霰ししな垂り落つる  
 ✓秋萩の露<sup>おも</sup>を重みとしだり枝の垂り葉の涙つゆし止まぬかと

〔湯地〕  
孝兄

二階堂の谷深くあればいくたびは道をわけわけ訪ひがてにして  
 ひきがやつ  
 比企ヶ谷の山べによれば道を遠みまたも来よとははばかられつゝ

朝から暗い雲がとぎして、僅かに雨が降らない。そして午には赤蜻蛉の群を思はせるような怪しげな薄日がさしかけたが、それも間もなく引込んでしまふ。只蒸すように暖くなって、気持は益々重い。

籐椅子よ、籐椅子よ  
 いとも古びた  
 けれども昔ながらの籐椅子よ  
 女子の白い腕は時に鞭よりも痛くつれないけれど  
 お前は  
 ともすればうなだれがちの私を  
 優しく支へてくれる

籐椅子よ、籐椅子よ  
 怪しげな

けれども昔ながらの藤椅子よ  
めまぐるしい運命の奸計の前に  
ともすれば積木のように脆くくづほれる私を  
お前はその怪しげな四本の脚に  
けれどもいつも変らぬ愛を以て支へてくれる

[×を附す]

---

お紅茶を飲みませう  
一口飲んで、「今日も静かに暮れました」と  
二口飲んで、「ですが寒空に  
どんなに悲しい人もあることでせう」  
[とんでもねえ！俺達に静かな時があれば  
それは病気か  
もっと悪ければ仕事に逃げられた日だ  
その上俺達は  
そんな退屈なことが大の嫌ひで……]

[×を附す]

---

カバンよ  
私の父がどんなにお前を可愛がったかは知らないが  
カバンよ  
私がピンと錠をはずすと  
お前はまるで馬鹿のような口を無遠慮にあける  
そしてお前はしつこくも  
いつまで私の身につきまとふつもりだい  
お前の居処としては  
場末の古道具屋の埃だらけな店先が  
どんなにふさはしいかは知ってゐるが  
カバンよ  
だがお前はそんなにもうとまれながら  
お前はお前の主人の原稿を  
犬のように忠実に守ってくれる  
カバンよ、安心するがよい

お前の主人はいつになったら  
新しいお前のかほりを見つけ出すことだらう

〔×を附す〕

---

机上のセント・エルモス・ファイア  
かつてはギヤマンと金との  
重々しいシャンデリエを飾ったお前  
ゲーテもルーテルもナポレオンも  
省ればみんなお前の育てた子だ  
だが今では  
時たま厠の隅に置かれる蠟燭  
前世紀の小さな形見  
けれども今度の恐ろしい地震で  
追の大都市がまっくらになった時  
手も足も働かなくなった人達に  
お前は  
とんでもない昔の力を見せたものだ

〔×を附す〕

---

色も香もない淡泊な水  
だが一度お前の様々の姿に気づいた者は  
大きな目を瞠ってお前をみかへすだらう  
お前はあらゆる変装をこらして  
裏と表とを全くわからなくする  
霞となり霧となっては  
春秋の思ひに綾を添へ  
大海に流れ出ては  
船を浮べ  
人々を世界の果から果にまで運び  
私達に快い夏の浴みを許す  
只時に一人二人を平気で呑み込んで了ふが  
爽やかな小川となっては詩人の心を捕へ  
露となっては葉末にも光る

細大の雨も人々を喜ばせ悲しますが  
又時に何の気まぐれか  
霞となり雹と降って人を驚かし  
恐ろしく美しい  
けれども恐ろしく冷たい雪となり  
更には洪水となり津浪となって  
家も樹も根こそぎにこそいで  
何処へとも好きな処へ持ってゆく  
また――庭池の中に水は金魚を育て  
田畝に水は稲を実のらせ  
溝泥の中に糸みみづを殖し  
子子をも浮き沈みはねさせる  
とまれ、何と云っても  
コップの中のお前は有難い  
お前が堅い不思議な氷ともなれば  
焼きつくような熱射の中に  
路傍のすずかけが  
堪えかてに葉をまきかへす時  
氷屋の店先  
蒼い浪暖簾をくぐる人足  
「スキ」一杯！  
「氷アズキ」のおかほりに  
彼等は苦熱の中に瞬涼を得て  
更に思ひ――の仕事にいそしまう  
更に一度  
お前が七色に輝く芳醇となって  
華やかなパーに顔を出すならば  
お前は若い人々を更にも若やかにし  
年寄にさへ  
罪のない冗談を云はせ  
子供らしい頓智を教へて  
明るい夜の街を更にも明るくする  
露西亞の百性さん達は  
強烈なヴォーツカに極寒を忘れ  
仏蘭西人は気取ったアブサントをながめて

甘い恋を囁き  
活潑な独逸の青年達は  
黄色いビールをしこたま飲んで歌ふ  
おゝ、そしてとりとめもない夢から醒めて見ると  
枕もとにお前はもとの水にかへって  
焼け燻れる咽を潤してくれることをも忘れない

---

#### 十日

まだ――空は晴れようとしなかった。重暗い雲は益々險惡に厚くかさんだ。葉山の小山の家を訪ねたが、留守だったので、午過ぎには鎌倉に帰って来た。その頃には、糠のような雨が風によって降ったり止んだりした。夜になって遂にすさまじい暴風雨がやって来た。家中のそこここに、雨は漏り流れた。風は気味悪く鳴り続けた。

---

男は女の張りきった乳ぶさを  
血もにじめと握りしめ、かきむしった  
女は白い歯を喰ひしばって  
男の髪の毛をむしりぬいて身をもだへた  
二人は狂暴な叫びを  
おろ――とおらび、泣きながらき合ひ  
堅い床に仆れてころびまはった

二人は夜毎に荒い言葉を投げ合った  
二人は夜毎に叫び泣き、むしりあった  
二人の骸に生傷が絶えなかった  
そして二人は互に愛し合ひ、幸福だった

〔×を附す〕

#### 十一日

天気はからりと晴れ渡って、暖かくなった。湯地がやって来た。午餐後、湯地と浜の方から大仏の方に出、長谷道を一めぐりして来た。

---

✓たながすみ低きが上に遠村も山もひといろある染めにして  
✓山のはのだいだい色の空は明く樹々はめづらし墨かげにして  
✓山もとの遠火は悲し山の背に残る緋が空鳴海鳴く音と

---

✓なればなる世のこととしはおもへどもなるに堪へねばなすよしもがな

---

✓いく日かも照る日見ずけりこの入日儚くはあれどしばしあかぬかも  
✓鶏頭の穂にかも淡く入日せばむら松わたり秋の蟬なく

---

十二日

〔欄外に記す〕  
〔岐路〕

堅い沈黙と労役とに仕へた三日の間  
太陽は決して私に挨拶することをしなかった  
私はそれを二つの意味に解釈した

「きつい労役が私を生かす道であるか  
それとも更に他のものが私の受くべき当然であるか  
彼はよくそれを知る故に（何故ならば彼は自由な撰択者である）  
彼はきっと私の沈黙の意味を了解するだらう」

「——お前のかぶと虫のように黙って了ふのだな  
よろしい、もっともっと働かせてやる——  
彼は彼の自由と共に亡びることを恐れる故に  
私の沈黙は彼を苛立たせるにちがひない」

まる三日が過ぎた時に太陽はすばらしい光を秋の空に投げた  
（それを私は試みであると信ずる）  
私は心強く労役に叛いた  
私は堅い沈黙を解いて、重い鎖をかなぐりすてた気がする  
併し私はまだ私の二つの解釈のうちどちらにも  
断然反抗しようとは思はない

〔×を附す〕

---

晴，午後，驟雨あり。

---

十三日

鎌倉はわが生ひしところ  
くさぐさのわが夢をかけにしところ  
朝なづむ白き煙か  
秋寒に鳴さし百舌鳥<sup>もづ</sup>がね  
白煙<sup>もづ</sup>今も見れども  
百舌鳥<sup>もづ</sup>もいま悲しく鳴けど  
わが夢もむかしながらに  
しかすがにすべもなき，夢はゆめにて

〔×を附す〕

---

兵隊よ兵隊よ  
殊には君等から唳々と鳴り出る喇叭は  
まだがんぜない私に  
誇りに勇ましい最初の夢を投げてくれた

だが，やがて遠い兵營の喇叭が  
何事もなく静かだった私に  
故しらず春の夕を悲しく思はせたように  
単純だった心に小さな疑惑を置いたように

今ではただ，ほんの少しばかり  
無意味な雑駁な調べを以て  
全くほんの少しばかり私に考へさせる  
兵隊だ，兵隊の喇叭だなど

〔×を附す〕

朝醒めると寒い程晴々しいいい天気なので、とんでもなく早く起きたのがはじまり。九時から十二時まで街中をかけずりまはって、やうやく粉一束ね。午後は午後で何やかやら、むしゃ――と日が暮れる。

十四日 sunday

朝から、叔母様と秋庭サンのバラックを見に行く。叔母様と別れて、十一時に湯地の処へ出かける。四時までとりとめもない話を続けて帰ると、一日どんよりとして居た空から、秋らしい、しめやかな雨が降り始める。又雨だ。

---

〔湯地〕  
孝兄

僕が君の「土用波」をひろい読みして君に返さうとした時、僕が何と云ったか思ひ出せるか? 「あらそへないものだね」。君はあの時、顔をほてらせて私を試さうとしたように、僕には思へたのだ。それだから、僕は僕の言葉の意味を曖昧にして、君をすっかり安心させてしまった。何故なら、僕こそ君を試して居たのかも知れなかったからだ。と云ふのは、僕〔追記カ〕はそれを感じただけで知って居るのではないからだ。〕に、はっきりした自信がなかったからだ。

併し、今考へなほして見ても、僕は間違っ居たにした処で、そんなに遠く間違ひすぎては居ないように思へるので、この手紙を書き出したのだ。君が赤い顔をしたと思った時に、僕はこれだけのことを考へたのだ。「君も云ふ通り、僕を真底から知って居るのは、まことに僕自身一人あるばかりだ。そしてそれ故に、僕は時々、せめては詩に歌に、誰も知らないような僕自身を殆ど露骨過ぎる程に、真実な僕自身をぶちまけてやらうと考へる。そしてさうする。

而も友達があつて、僕のそんなところにまでふと感じ得るような場合を見ると、僕は不安に陥らずには居られない。ひるがへって考へれば、斯うなのだ。友達がある。而して誰も知らない僕の秘密にふれようとする。実際の処、僕はそんな処までも一々僕と云ふものを知ってくれるような友を持ちたいものと希って居る。だがまで――。その秘密を知るような友は、塵程もあまさない僕一個の善悪、誇羞の全体を何一つ残さず知ってくれるような、そんな友でなければならない。それでないならば、僕は全然僕の周囲に溝を作ってしまった、一人の秘密を永く守ってやらねばならない」と。で、僕の考へは間違っ居たらうか? 或はより以上に遠く間違ひすぎて居たらうか? 僕の意味は、斯うだった。

「あらそへないものだね。僕は君に同情する!」。だが、これは単に僕の思ひ過ぎだったかも知れない。勿論僕は君のそんな処にまで立入らせてくれとたのむものでもない。

それならば、何故にこんな手紙を君に送らうとするのか。只、僕には僕の考へ、カッ

コの中の□の意味が、恰も君の「土用波」に、何処かでもつれあって居るように考へられるからだ。何だか謎めいて居て、益々君を不快にするかも知れないが、それは僕がある確証を持たないことを、僕自身が知っているからだ。

---

十五日

天井に、枕もとに  
私は雨漏りの音を聞きながら  
夜を一夜  
まんじりとしなかった  
起き出でてみることもなく  
天井に、枕もとに  
私は雨漏りの音を聞きながら  
身も心も  
はげしい熱病人のように  
ぎごちなかった

やがて風のない闇に  
外では  
瓦も砕けよとばかりすばらしい雨が  
併し何か遠い別の世の出来事のように  
ザーッと一律な音をたてる  
すると伴奏に誘導されて響き出た主題のように  
たゝゝゝゝ――

天井裏に水の流れるのを感じる  
と、私の顔にも  
冷たい雫がはねた  
一つ ――― 二つ ―――

私は驚かなかった  
それは私のほてった頬に、快い程ではなくとも  
死んだような私に  
何の関りもないものだった

天井に、枕もとに

雨漏りの音を聞きながら  
夜を一夜  
私は死んでゆくもののいまは心静けさを考へる

〔×を附す〕

---

秋も晩く  
私はひいやりと冷たい籐椅子に靠れて  
彼方の黒い海を眺めて居ます

ここにはまだ雫のような雨が残っては居ますが  
もう晴れる時が来たのでせう  
遠い水平線の上が明るく黄ばんで  
向ふの陸地がほのかな灰色に、又紫に  
消え残った雲のあひまへにのぞきます  
風が出て来ました  
露に濡れた、薄い濃い  
幾百といふ、あかいコスモスの花が  
重さうにゆらへと揺り靡きます  
黒い海には只一つ白い浪頭も見えず……

秋も晩い午さがり  
ひいやりと冷たい籐椅子に靠れて  
しくしくと下腹の痛むのが気にかかります  
小桜の枝に百舌鳥が一羽  
少しの風にも重さうに  
しなった枝の上にゆれながら  
ジュ　ジュ　ジュ　ジュ

百舌鳥が飛んだあとに  
地の底から湧くか  
うつろなる　うつろなる  
晩秋の　小蟲の　モノトーンの引曳

〔×を附す〕

---

(乱想)

終日の嵐の後に見る夕日は明るく  
渾沌から渾沌への途上の小さな静寂は全き静寂である  
静寂の中に響く小さな声は如何に大きく  
あまりに近いものはどんなにぼんやり見えるか

而も静寂の中に聞く小さな声がそんな静寂を更に深めるように  
渾濁の中に居てのみ私は私なりの醜さに輝くであらう

〔×を附す〕

---

何ごとだ、又々終日じめ／＼として居る、夕方雨がやんで、一寸夕日が明るくさしかけたが、夜は星もない。風が吹くから、晴れ、ばよいがと思ふ。

十六日

今度の地震を知ってるか  
今度の火事を知ってるか  
俺の此の頭は新聞とどっちかと思はれる位  
頼みないものぢやあるけれど  
何でも何十万とかの家が  
つぶれて、へしゃげて、よちれて、そして焼けたんだとよ  
十何万とかの人々が  
つぶれ死に、焼け死んだ上に、飢え死んだのだとよ  
ところで正直なところ  
何万と云ふ勘定は俺の頭にどうもしっくりとしねえのだが  
兎も角俺が見ただけでも  
何とかビルディングなんて云ふどえらいものまでよ  
街と云ふ街は、から意気地のねえざまよ  
まあそんな訳で、俺の家も焼けちまって  
俺もあの夜なかちう火を背負って逃げずり廻ったが  
幸なことに、全く幸ひよ  
俺はまだちゃんとヤケドもしないで生きてるんだ  
俺も一時は何うなるかと思ったっけが

うん、まったく神様はおなさけ深くておいでなさる  
俺は今でも何うにかやってるし  
これから先だって、きつとうまくゆくんだらうよ  
お上<sup>かみ</sup>ぢゃ毎日のお米を下さるし  
まったく人様はありがてえ  
岐阜の何とか九平様は暖かいシャツを届けて下さるし  
大阪の何てやらお医者様は  
まあ、たいして要もねえものぢゃあるけれど  
揚<sup>揚</sup>子、はみがき、石鹼まで下さった  
遠いメリケンからさへ  
食ひものはおろか、お医者様から病院までも  
軍艦に乗せて運んでくれる  
たいした入費にちげえねえんだが——  
「人道なんてやう」と云ふ<sup>ママ</sup>のものは  
俺はいつかに見た夢か  
でなけりや、自分で喋った寝言位に思っ居たが  
どうして、まんざらでもねえらしい  
ところで俺はそんな風に思ひこんで居たんだが  
ひょっと上野の山を通<sup>やつ</sup>たらよ  
すれちがひに何とか云った奴がある  
俺かなと思ったら、そいつは平気でいっちまった  
何かぶつ——口の中で喋ってたっけが  
何でも煎餅がどうてやらで  
煎餅をどうでやらとか  
煎餅煎餅って、何処までいっても煎餅だった  
俺は驚いてほんやりして居たが  
後になって考へりや、奴はよっぽどひもじかったにちげえねえ  
それから街であつた姐さんも云ってたっけ  
何とかを食べても、何とかを飲んでも  
えゝ、馬鹿馬鹿しい  
お金を捨てるようなものだものねえ——  
俺はそんなことがあつてからは、つく——み用心しだした  
こりゃ、神様もあんまりあてにはならねえと

[×を附す]

---

秋も深くなった頃  
吉野桜の若木に白っぽい花が  
二つ三つ間違って咲きました  
そしてここに  
間違って地からでも湧いたような  
黄色い蝶々が  
怪しくよろゝ飛びました

夜は数知れぬ青い星の中に  
西の空に  
糸のような新月が鋭く光りましたが  
そんな空から  
冷たい露霜がべっとりとおりて  
夜目にも白い霧が  
地を低くたれこめました

翌日、まばゆいような朝陽に  
その露霜もきらゝと寒く光りましたが  
吉野桜の花が  
咲いたまゝに力なく萎〔で脱力〕みゐるのを見ました  
少しはなれた芝の葉に  
昨日の蝶々も死んで居ました  
神様はどうしてこんな間違ひをお許しなさるのでせう

〔×を附す〕

---

朝、湯地の処へ一寸寄って、九時半の汽車で東京に帰って来る。晩に驟雨あり。

十七日

快晴。番町まで用事で出かける。兄は神戸に立ち、母は鎌倉に行く。

---

私は広い練兵場の真中に

たった一本残った古い松の木の根元に  
ほんやり腰を下して居ました  
晩秋の斜陽が赤い力ない光を投げて  
松の木の影が長く長く  
平らな黒い土にかかって居ました  
私は久々で此の広い広い土を  
少しは感傷的な気持も交へて  
静かな心で眺めて居たのです  
するとたった一人の洋服を着た女の子が  
遠く此の練兵場を横切って行きました  
女の子は遠目にも俯いて本をひろげて居ます  
女の子は正しい足どりで  
向ふの向ふの霧の立つ杜の方へ  
併し決してそちらを見ようとはしないで  
彼女の本に見入って歩くのでした  
あゝ、女の子は彼女なりに  
興味深い物語の中に一步一步入って行くのでせう  
彼女の正しい足どりが  
ほんの少しばかり乱れました  
彼女はいつかは止まるべきものが  
ほんのはづみで止り得ないで居るかのように  
無意識に足だけをのろ／＼と運びました  
女の子はとう／＼止まりました  
ちっと止ったまゝ物語を読みます  
ほら、歩き出しました、五歩、十歩  
女の子の足どりが乱れました  
そして止まりました  
それから三歩歩いて、また止まりました  
私は遠くから見て居て不思議なほどに  
女の子のものごしを一々はっきりと感じます  
女の子は急に思ひ出したように  
新らしい足どりでどん／＼歩き出しました  
あゝ、けれども二十歩とは行かないうちに  
また／＼忘れたように歩みを止めました  
それから三歩、五歩

女の子はまた立ったままになりました  
ですが笑ってはいけません  
女の子は今、彼女の最上の国に居るのです……  
そして私も  
遠い兵營の屋根の上に  
最後の赤い日がぼんやり落ちて行くころ  
私も私なりの夢から醒めて  
冷たい夕べの食卓に急ぎました

〔×を附す〕

十八日

快晴。朝から鎌倉に行き夕方帰る。夕食後、隣の遠山五郎<sup>227)</sup>さんの処へ行って、二時間ほども喋って居た。

(雑拾の序)

策の目を漏れた落穂です  
水が足りないで乾枯びたもの  
虫に喰<sup>は</sup>まれたかけら  
まだ――必然と偶然とが生んだ所有混結です  
とまれそれらはみんなみんな  
何んな意味でも私の畠から生れたのです  
たとへそれらの中には沢山に  
私がひそかに耻ぢて居るものがあつたとて  
やっぱり私には懐かしいものがあります  
そして若しもそこに  
間違つてこぼれたよい実がありましたなら  
見つけ出して可愛がって頂きます

十九日

二十日

午前中、惣ちゃんが画き度いと云ふので、一時間程座る。丁度止めた頃、中井さんが遊びに来て、賑やかに暮らす。

二十一日

中井さんと朝から家を出て、渋谷まで一処に出て別れる。別れてから番町に出て焼跡に行き、田辺サンに証書のことなど聞きに行く。午後、江戸川の榎本の処を尋ねて、家のことをはなして来る。夕方帰る。

二十二日

朝から一寸内閣まで、用事で出かける。途中何年ぶりかで由利正通<sup>228)</sup>に逢って、甘露寺のことが思ひ出されたので、幸ひ用事も早くすんだし、ずっと千駄ヶ谷へ廻って甘露寺を訪ねた。三時前家に帰る。

二十三日

終日家に居て何の慰めもない。家の中はごた／＼して居て、自分で自分らしい生活の出来ないことをあぢきなく思ふ。其上風邪に犯されて、のべつにせきが出る。

二十四日

雨、冷たい雨、曇、晴、満月。

やれ／＼寒いこと、頭の重いこと。

それでも午後、惣ちゃんと遠山さんに行って喋り込んで居たので、何うやら日が暮れる。

どうも寒いこと、気がむさくさすること。だが早く床に就けば、大きなパイプをくはへれば、どうやら永い地獄<sup>〔獄〕</sup>にも行かずにうまく眠れさう。

二十五日

朝は例の通り、惣ちゃんの前に座る。

午後、道元坂から恵比寿の方に出て来る。咳がひどく出て体がほてって居る。其上くだらない用事に攻め立てられ、追ひ廻されて……一週間、少しの詩もない。又少し糞落着きにおちつかなければならない。あと五日で学校が始まりさへすれば！

シップをして、十時には就寝。

バーナード・ショウの「人と超人」を三幕読む。

二十六日

落着かない。何故か苛々させるように、晴れたり曇ったりする一日。午後、道元坂から青山まで、恵比寿の方まで走りまはって、結局目的を果さずに帰ってくる。夜は、遠山さんの夫妻と保ちゃん、惣ちゃんも来、逸人も国からひょっこり帰って来て、九時過ぎまで大変に賑はった。

バーナード・ショウは、自分には非常に興味深い。前に読んだ運命の人よりも、自分には余程面白い。運命の人のようにデリケートなところはないが、而も尚深く暗示的である。

二十七日

おゝおゝ、この私といふ労働者は！  
次から次へと興もない用事を追って  
朝から晩まで街から街を  
犬のように丹念にかぎ歩いても  
私の主人の私の母は  
私の主人の私の妹は  
私の主人の私の祖父は  
私の主人の私の家は  
更に倍の用事を私の前に見つけて置いてくれるばかり  
私が秋の日の切通しをすた〜と走るように歩いて居ると  
おゝ、空の美しいこと  
それは紫と灰との最上の混融である  
それは彼方の黒い森の上に淋しくも華やかな紫  
それは遠く薄陽にきらふ白壁の上に果しない灰色の空虚  
けれどもそんなひまにも  
私はかくしに押込んだ二百円の不安  
間違って捺された印形の呪ひに  
十日の間私につきまとひ、私を追ひまはす二千円の小切手  
其の上ほんとうに私自身の為の  
ほんの五円か十円にも足りない――  
(だがそれがあれば、私は私らしくどこかでもって  
それを少しばかりの筆と絵具とキャンパスにかへてくるのに！)  
私はそんな重い心を背負って  
毎日毎日街から街を  
犬のように忠実にかぎまはり  
そのくせ身につかないそんな用事を  
私は小さな復讐から一日一日と延ばして居ながら  
(そんな風にして  
実は用事の後に用事を積んで居るのも知ってゐる)  
見給へ、皮肉な夕べは秋らしく

遠くから白い霧を吹きよせて  
(何とまた自然の夕べは美しいことだらう)  
私をせき立てる、せきたてる  
私らしい仕事へ、仕事へ！  
けれどそれも只小さな望み……………  
これでも私は運命にはかなりに従順なつもりなのだが  
おゝおゝ、私といふこの労働者は！  
つまりは朝からの重い心を背負ったまま  
劳れて、そして不吉な闇を目の前に感じながら  
それでも夜といふ小さな隠家にそっと帰ってくる

---

夜は、もうてっきり死んでしまったものときめこんで居た服部<sup>〔仁三郎〕</sup>がやって来た。随分ひどい目に逢っては来たらしいが、兎も角いつものように快活に人を笑はせる。

二十八日

二十九日

昨夜から今朝へかけて雨がふったらしく、土が程よくぬれて居る。弱々しい日が、さしたり蔭ったりする。午後、久顕さんと練兵場<sup>229)</sup>の方に散歩した時には、薄陽の中から霧のような雨が斜めに飛んで、広い練兵場が紫白に深く霞んで居る……けれど又又又！久顕さんとの話しは、家出のことにまでも……兎も角も、私達はもう久しい以前から、人々のひそへ話しを聞きさへすれば、胸が痛むのを覚えて、心が震へるのを禁じられないようになって了って居るのだ。そして、そんなひそへ話しを久顕さんと二人で今日も聞いて、憤ガイして家を出たのだった――

三十日

午後、惣ちゃんと遠山さんに行く。三時十五分の汽車で鎌倉に来る。兄も夜晩く来る。

三十一日

兄と八時三十八分の汽車で横須賀へ行く。秋好氏に逢って、逸見からランチで浅間に佑さんを訪ねる。艦で昼食の御馳走になって、一時二十分の汽車で皆で直矢叔父様の遺骨<sup>〔上脱力〕</sup>を守って鎌倉に引げる。母と英子サンも来たので、晩は皆でしんみりとお通夜をする。

## 十一月

## 一日

一日二日前から馬鹿に暑い。昨夜から風まじりに降り出した雨も、夜の明けると同時に止んで、寝不足の身をひどくけだるくする。朝のうちに母も妹も東京に帰るし、自分は三時二十分、停車場まで佑さんから金をとりに行き、次の汽車で東京に帰って来る。早く寝る。

## 二日

おや、ノックの音だわ  
ちょっと待って下さいな  
今直ぐに窓をあけますから  
まあ、よく来て下さいましたのね  
どんなに待ってゐたことでせう  
もっともっとこっちにおよりなさいな  
真暗で顔が見えないぢやありませんか  
さう、あなたはほんとにひどいわ  
私どんなに待って居たでせう  
(お月様が暈をかぶりました)  
ですがまあ嬉しいこと  
あなたはやっぱり来て下さったわ  
まあこれを私に下さいますの  
ヴァイオレット！  
え？私の髪が金色に輝くのですって  
そしてこの私の髪の上にはこのヴァイオレットが  
どんなにかつまらないものではあってみても……  
そしてそれを知っては居るけれど、ですって  
まあ、はづかしい  
そして、あら、これも！  
私の大好きなピンク・ローズ！  
何て美しい花でせう  
そしてあなたのお心のように優しく温かですこと——  
あゝ、あなたはほんとにひどい方  
私、お世辞だなんて思はれる位なら——  
あんまりだわ、あんまりだわ、あんまり……

あゝ、これですっかり練習が出来たのに  
にくらしい！

(月影が暗くなって、窓の戸に  
雨蛙が不寐な声を鳴き出しました)

[×を附す]

---

おゝおゝ、まだもまだも、此の淋しさを続けるのか  
わし達は確実な一步をふみしめるかほりに  
虚しくも消える千の夢を  
あかず築いては壊してゆくのだとは云へないか  
そしてそれを「つひの望み」  
「謙遜な願ひ」と信じて来たか  
或は間違つて来たのだとは云へないか

而も見よ、望みとは何か  
そんな小さな影！  
小さければ小さい程、誠しやかな  
そんな卑劣な醜い幽霊  
併し又見よ、夢とは何か  
満たされない心の暫しの安息の為の夜である

あゝ、若しもさうならば  
二つのうちのいずれかが、たよるべき或は儂い  
実在か又虚空であるのか  
小さな幽霊と「つひの願ひ」と  
又「謙遜な望み」と闇と……  
おゝおゝ、わし達の生活の、観想の、追迷の謎が  
おゝ、いつまで此の淋しさに続くのか

[×を附す]

---

わしらは一つの言葉に盛るにはあまりに惜しい  
〔複〕  
複雑した貴い感情を持つことがある  
或はより多くのそんな感情を――

而も限りある言葉に  
限りなきころを盛る人  
詩人は憐むべき哉  
けれどもわし達も  
そんなにたやすくへこたれはしなかった  
わし達は永い間そっと試みて来た  
そしてわし達はとうへ望みに行き逢った  
わし達は先づ一つの言葉に、一つの句に  
空気を与へることが出来た  
わし達は一つの疑問によって  
あらゆる答を導くことに成功した  
わし達は一つの断定の中に  
普遍的なものを暗示することの可能をさへ知った  
そしてわし達はつまりは一つの言葉の上に  
言葉の外のもの、言葉以上のものを  
盛り上げ、味はふことに少しづゝ慣れて来た  
わし達は永い間そっと試みて来た  
おゝ、詩人は今こそ関の声と共に  
わし達が永い間試みて来たものを  
わし達が築き上げ、覆へして来たものを  
わし達が確信を以て知って来たものを  
大胆にここに示していい時が来た  
わし達は実のったものを苟らねばならない  
わし達は苟入れたものを無意味に腐らせたくはない  
おゝ、今はそんな時である  
わし達は大胆に  
わし達の尚い目的の為に  
わし達の完成された準備の上に  
大胆に自由に  
おゝ、はじめの製作にかかっていい時である  
今はそんな時である！

〔×を附す〕

---

今日から学校に出かける。昨夜から降り出した雨も、昼前には止んで、秋らしい日が

暑いようである。

三日

快晴。

四日 sunday

久元伯父<sup>230</sup>様の五年祭に当るので、小石川に行く。帰り、青山の典範会社と花屋に行く。  
夕方帰ってくると、ぐったり労れて了ふ。

〔欄外に記す〕  
〔恐怖〕

私は小高い切通しを越えて  
真直に赫土の坂道を降りて来た  
彼方の雲が灰色と葡萄色との怪異な斑に燃え  
息づまるような蔭暗の中に  
何んな響さへも無限に深く吸ひこんで了ふ  
白い霧が低くこめて、その白い霧が  
汗ばんだ軀にぞっと寒い  
私は又空を突く棒のような櫂の立樹を見た  
私は棒の先に針金の毛を植ゑたような  
高い高い脊せた立樹を見た  
そして其の下に私は更に黒い森の中に  
恐ろしく暗い赤屋根をも見た  
私は森かげの闇の下に  
孟宗竹のもくもくと青い林を見た  
おゝ、そしてその青いもくもくの中に私の家がある――

〔×を附す〕

五日

学校から帰って見ると、もう皆は鎌倉に行って留守だった。遅く昼食をすませ、惣ちゃんを呼びに行ったが、遅くまで帰らないので帰ってくる。小城さんでは、保ちゃんが一人でチビへお酒を飲んで、会計帳を繰っては考へこんで居た。で五時まで相手して、色々な話をして居た。晩には遠山さんに行つて、蓄音機でシラフで踊りまはつて、十時前に帰る。床に就いたら、伊藤が鎌倉から手紙を持って帰つて来た。佑さんの字で

御母様より

左記御準備ありたし

一、青山墓地の竹中（茶屋）に命じて控所（一間か二間）、御茶菓（二皿）の用意ありたし

一、鎌倉発一時四十八分の列車が東京着時刻までに、自働車三台準備ありたし

六日

朝食を遅く食べて、保ちゃんの処に昼飯に誘ふようにいってくる。帰って、茅ヶ崎から来た鶏を料って、遠山さんをも招いて、昼ははやめに三人で鶏鍋をつつつく。十二時半、保ちゃんと二人で家を出て、青山の墓地に行く。竹中に悉皆準備をさせて、二人で自働車三台をたのんで東京駅にお迎へに行く。

汽車がついて見ると、久顕がたった一人降りて、江の島の神官さんの都合で全部予定を一日くりのべたことを伝える。で又三人で青山の墓地にはしると、嘉瑞さんと川上の叔父様が来て居られる。それから、上原の叔母様<sup>231)</sup>も孝雄<sup>232)</sup>さんも、千代子叔母様<sup>233)</sup>も来られたので、一々訳をおはなしして、お詫して帰って戴く。竹中にも、典範会社にも、神官にも、すべて明日に繰り伸べて貰ふ。日も暮れたし、癪にも障るし、久顕さんと仏<sup>〔西脱カ〕</sup>蘭料理に行って、すばらしいディナーをとる。強い酒を三つづゝ程も飲んで、ゆったりした気持ちになって、歩いて家まで帰る。

七日

雨。じく―といやな雨が漸く午後二時には止んで、自分は恵比寿から品川に出て、鎌倉からの一行を迎へ、東京駅から自働車で青山の墓地に向ふ。式を終へて暗くなる頃、目黒に帰る。今日で何から何まで綺麗になった筈なのに、家の中は、そわ―と落着かない気分が充ちて居る。硝子戸一枚の外は、秋の夜が恐ろしく静かである。

八日

午後四時から、田端の溝口を訪ねて、ブロンズを取って来る。

九日

夕方、久顕さんと練兵場の方を一廻りする。夜、惣ちゃんも来て、皆で遠山さんに行つて、十時半まで遊んでくる。

<sup>〔折〕</sup>切角楽しみに望みをかけたハイフェッツも、やっとのことで来て見れば、十円均一だと。近くて遠いとは、こんなことかしらん。遠山氏の処で、蓄音機で聞いて居た頃、本物を聞いて得意だった人々が何人居たことか。



練兵場にて

#### 十日

夜に入って雨。劳れて居るので、八時前に床につく。

十時頃騒がしいので醒めると、大変なお客さんである。小城さんの人々と中井さん！小城サンの人々が帰った後、起きて中井サンと話しする。中井サンは、<sup>〔泊〕</sup>留る。中井サンの兄サン<sup>234)</sup>の肖像を作ることを約束する。

#### 十一日

婦人画報社の人が二人、遠山サン<sup>〔紹介〕</sup>の照会で写真をとりに来たので、四枚ほど色々なところを写して貰ふ。

#### 十二日

昨日の新聞で見ると、ハイフェッツが今日午後二時から、日比谷で演奏会を開くとの事。一円均一のことだったので、中井さんと相談して、惣ちゃんと保ちゃんと六時半には家を出て、弁当持で日比谷に行くことになって居た。で暗いうちに起きて、弁当まで持って出かけようとする、雨が降ってくる。併し自分はそれでも兎も角行ってみるつもりで、小城さんまで出かけて見たが、保ちゃんはまだ寝て居り、惣ちゃんもまるで行

く気がないので学校に行った。どうしても行き度い気がしたけれども。そして学校へ行っても雨は止まず、大いにあきらめたつもりで弁当も開いてしまっ、昼までポーズをさせたりして過したが、やはり思ひ切れないで日比谷に行く。演奏場に入ると、もう確かに八分通りは入って居る。けれども、兎も角も来て見れば、落着いた気持ちで後の方にぼつねんと座って居ると、知治<sup>235)</sup>さんがみつかる。知治さんは、江波の為に早くからいい席を取って置いたとの事だったので、其処に入れて貰ふ。熱心は恵まれて居る！

#### 曲目は

|             |     |          |
|-------------|-----|----------|
| アーヴェマリア     | ……… | シューベルト   |
| ミニユエット      | ……… | モツァールト   |
| ノクターン (変ホ調) | ……… | ショパン     |
| 苦業僧の合唱      | ……… | ベートーヴェン  |
| ターキツシュ・マーチ  | …   | ク        |
| 歌のツバサ       | ……… | メンデルスゾーン |
| ギター         | ……… | モスコウスキー  |
| メロディー       | ……… | チャイコフスキー |
| 糸績ぎの歌       | ……… | ポッパー     |
| チゴイネルワイゼン   | ……… | サラサーテ    |

外に、サラサーテのスペインの舞曲何とかとアムブローズ (?) のセレナード及び他に一つ。

三日前に近くて遠く感じたものは、却って遠くて近かった訳である。大変に華やかなように聞いても居り、思ひ込んで居たハイフェッツから、寧ろチンバリストから受けたものの方に近いような、落着と真面目さを感じたのも嬉しかった。いいあんばいに雨は止んで居たけれども、非常に天気が湿って居た上に、野天での演奏であるから、自分は余程のハンディーを用意して居たにもかかわらず、永らくいいものを聞かなかった自分には、近頃でない慰めであった。只も少しと思はれるのは、あまりにポピュラーなものばかりが奏されて、御馳走沢山になった感じがなかったではなかった。曲目が半分になっても、ヴェーターのコンチェルトとか、ブラームスのハンガリアンダンス位入って居てほしかった。

十三日

晴

十四日

晴

十五日

晴。学校の帰り、四時半過ぎ、笹塚に山口さんの処に行く。晩、後藤兄弟がやって来る。十時半家に帰る。

十六日

風邪引き気分である。空気が乾ききって咽がいがらっぽい。

十七日

朝から曇って寒い。晩には、久顕さんとお隣りに行って、九時半頃帰る。雨になる。

十八日 Sunday

終日しと〜と細かい雨が降りつづける。朝から荒川の奥さんが増子さんをつれて来るし、田辺さんが来るし、榎本が来るし。晩には遠山さんの奥さんが来て、遊んで行く。

十九日

此の頃の、路傍に堅くなって行く草の葉のような日が、これで丁度一週間続く。今日も亦、朝からどんよりと曇っては居るが、それでもいづらか暖かい。四時近くなって、まる一時間と五十分もかかって学校から帰って来ると、げっそりつかれて了って居る。

アンドレーエフのアナテマを読む。訳者の序文で見ると、ダヴィッドとアナテマとが基督とサタンに譬へられて居る。又一方には、ゲーテのファウストと結びつけることによって、『アンドレーエフのオリジナルな天分を認め』ようとして居る。而して最後に、訳者自身は此の劇を『智の悲劇』と呼んで居る。そこで自分の解釈と興味とを吟味するならば――

ダヴィッドは高慢なる実行の犠牲、人間性の弱点、尚、単性と多性との、個的理想と多元的現実との永遠の矛盾である。スーラは空想的、浪漫的理想である。群集からは反対に「求むる心」と信仰の力とを認めることが出来る。アナテマこそはサタンでもメフィストでもなく、実に現代的な悩みを悩む正直な人間である。而して、六と八と二十と、東と西、南と北。それから『名』とは、『数のうちに不滅の、永遠に量と秤との内には生きるが、生命としては生きられない不幸なる』アナテマ。『数の内に死んだ、量と尺度との内に死んだ、併し不滅の焔の内に不死を得た』ダヴィッドと共に、永久の不知であり、謎である。とまれアナテマは、唯一的単性的理想主義への大鉄槌である。

二十日

ぽかへと暖かい日が照ったが、昨夜から今朝まで降り続けたらしい秋雨に、街はぐじへときたならしくぬかるんで居る。

学校に中井さんが兄さんの肖像を見に来た。惣ちゃんと、あゝでもない、こうでもないで、結局はぶっつぶしてふ。

メーテルリンクの七女王を読む。浪漫主義者の夢のような絵である。霧のような舞台を見なければならぬ。夢のような老王、老妃と王子と王女等とを見なければならぬ。リズムカルな併し不思議な会話をも亦、この目で見なければならぬ。そして、此の芝居を解するものは、物語の中に生き、舞台に動き、王子となり、中の女王となり、老王、老妃となって、其のロマンチック、センチメントとを享樂し得るものでなければならぬ。

二十一日

天気は綺麗に晴れたが、空気が乾ききって咽がいがらっぽい。詩が何処かへ逃げ出してしまったので、何か毎日苛々して居る。赤ん坊はよく泣く。どうも家中の者が、皆が皆ちがった思ひで、不愉快な日を送って居るようである。

メーテルリンクのペレアスとメリサンドを読む。此の頃の私からは、遠い遠い国の物語である。美しい絵ではあるけれども、ありふれた神秘への病的恐怖が鼻を突く。

二十二日

いつの間にか

よく耕された畑一面に白い霜がおりて  
朝の新開町を勢よく通る人人の口から  
白い息がぷつぷとふかれ  
柔らかな太陽の光にそっと消されてゆく  
私は毎朝毎朝  
長い長い曲りくねった急な坂道を  
息せききって登って行って  
おゝ、中途でほんと一息して  
立止って後をふりむくと  
あゝ、私が高く登ったこと  
うねへと長く私の登って来た坂道が  
下の下の下冬の森の中に消えてゆく  
そして彼方  
遠く向うの小高い丘の彼方に

寒いすきとほった冷たい風の中に  
深く深く雪に被はれた富士山の頭が  
紫色にきら／＼と光って居る  
私は毎日毎日そんなにして  
長い長い急な朝の坂道を登っては  
中ほどでほっと白い息をついて  
ふりかへって、「おゝ」と思ふ  
私は故知らず、「おゝ」と思ふ  
だが私が始めて此の眺めを見出でた時  
もう既に既に時が遅すぎてゐた  
私は勞れて居た  
私は痺れて居た  
私は生活の虜になって居た  
私はそんな眺めを  
美しいとも悲しいとも思はないような  
あゝ、そんな私になりきってゐた

[×を附す]

[欄外に記す]  
[女と呼ぶ猫]

猫よ  
炬達（鍵）の上から  
そんな風わしに俺を見ないでくれ  
お前はまるでこの俺が  
お前よりも不精な  
お前よりも不幸な  
お前よりも危険な  
お前よりも退屈な  
お前よりも気まぐれな  
何か、始めて見るよそ人のように  
用心深く  
けれども何とまあ不精げに  
興もなく俺を見つめるのか  
それでも  
俺は俺なりの仕事を持って居るのだ

俺は俺なりの親切をも  
俺は俺なりの憂鬱をも  
俺は俺なりの正しいものをも  
おゝ、知ってるか？  
その上俺は  
お前を大嫌ひに思ふ心をさへ持って居る！

〔×を附す〕

---

二十三日

新嘗祭で学校は休みである。私達は先達から計画して居たように、朝は平生と同じように早く六時前に起きて、朝食後弁当を持って家を出た。新宿に出て、笹塚で皆に行き合ったのである。此の企は中井さんの良さんが、十二月に兵隊に出るので、其の送別の意を体せられたものである。そして集った人は、総べて十五名。笹塚の連中と目黒の連中とが殆ど総べてである。

私達は代田橋から電車で国領まで行き、歩いて玉翠園に行く。これで私達の一年に一度か二度のピクニックも五六回になる。私達はいつものように、茶屋にはなるべく世話にならないように、川原に薄を刳り流木を拾って、持って行った食料の調理にとりかかる。先づ青竹に刺された二羽の鶏が立派に丸焼にされ、湯が沸いて紅茶が入る。そして皆の思ひ思ひの弁当が開かれ、ハムが切られ、パンがむしられる。而して私達のすき腹がぐーぐーなって、そこここに明るい笑声と舌鼓がなる。食後の菓子や果物がまだ――沢山に残って居るうちに、皆はもう満足して了って、舟を川に浮べる。丁度少し時が遅れたにも拘らず、天気は大変によく晴れて、川原は風もなくぽかぽかと暖かった。夕方まで皆は心からの冗談を云ひあつて、笑ひ楽んだ。

## 二十四日

雨、朝から晩まで雨。学校から帰りに、野崎が遊びに来る。晩、兄と野崎と三人で小城サンに出かけ、踊りがはじまって、皆興にのつて、夜の更けるまで踊りぬいて了った。一休みして、トランプなどして小城サンを引上げて帰ったのは、夜明前の三時だった。  
〔の脱力〕  
雨が止んで深い空に、満月が昼ような光を投げて居た。

## 二十五日 sunday

天気がよくなって、気味の悪い程に暖かい。野崎も勞れてばや――して居たし、自分も七時には起きて居たので、ひどく勞れて居た。日暮前、野崎は帰って行く。夕方になって、

空一面にいやな雲が出て寒くなる。明日は雨だらう。

二十六日

晴。午後、中井サンが来る。晩、中井サンと小城サンへ行って、十二時まで踊る。

〔2 頁白紙〕

(『万葉集』等の歌約百五十首省略)